
負け組みの視点

敬愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

負け組みの視点

【Nコード】

N1034J

【作者名】

敬愛

【あらすじ】

第一部は私小説に近いと思います。

色々あった人生の中で比較的幸せだった時期の事をピックアップして書きました。

第二部は結構嘘多いです。

第三部 変な所で切れていたなので文章追加しました。

第四部 三部の続きだね。文字数稼ぎ？

第五部 二ヶ月で五枚。話にならないな。

第六部 お前は小説に向き合ってない。

第七部 僕は桜田さんを見切り変身する。

第八部 一体お前はどんな顔してるんだよって気になるかもね。

第一部

とにかく生きるのが苦しくて苦しくてしょうがなかった。そしてとにかく金が欲しかった。

株・FX・競馬・パチンコ・パチスロ・麻雀・非合法

カジノ・宝くじ。不労所得を得られる物ならば

何でもやってきた。そしてそのどれもが失敗に終わった。

高校生の時に友達との今となっては夢のような交遊の時間の隙間

をぬってパチンコで稼いだ（その当時はまだ、

勝てる店や、攻略法が存在していた・・・

それは今でもまだ存在するのかもしれないが）

200万円は全て泡のように消えてしまっ

ていた。まるでボク達の世代に大きな希望となっ

ていた、「バブル景気」の終りと一緒に訪れ

た一つの小さな破綻のように。27歳の時だ

った。ボクはどうとう大学には入る事が出来な

かった。「学歴社会の申し子達の時代」に
おける残党の中において負け組みだった。話
はまず中学生の時にさかのぼる。ボクは勉強は嫌い
で、授業はまともに聞かず、前の席の女の子と
恋人の名前の当てっこなどして騒ぎ、授業の妨
害ともとれる態度で、それでも先生には存外
評判が良く（中間・期末・学力テスト等で学
年十位以下に落ちる事はなかったからだろう
か）、花粉症で目を腫らして保健室に行った
ときなんかに、保健室での治療を早々に切り
上げてもらい眼帯姿ですぐに教室に戻った時
は、「あいつはあんな状態でも勉強しようと
しているんだ。偉い事だぞ。」とほめてもら
った事もあった。

友達は不良が多かった。不良といっても弱

きを助け、強きを挫くという任侠の精神を持った子が多かったと思う。その中でも羽柴君とは仲が良く頻繁に助けられたものだった。

羽柴君は性格が男らしく見た目は色白だったが、喧嘩は強く、ボクが苦手になっている不良君と問題があった時にはとても助かった。一緒にしていると心強く、音楽や図工、体育等、別教室に移動するときはボクがトイレに行っていたりしても教室で待っていてくれて、行動を共にする事が多かった。ボクも学生服の裏のカフリンクスをキラキラしたガラス製の物に変えたり、ボンタンと呼ばれる太腿の辺りが太く、裾が狭くしぼんでいるズボンを履いたりして不良の真似事をしていた。憧れがあったのかもしれない。

ある時、井狩と言う素行の悪い奴が

アキラという奴を「お前の話し方なんかむかつくんだよな。」

と難癖をつけてビビらせていた。最初はのほ

ほんとした顔でのらりくらりと聞いていたア

キラだがその態度が井狩を一層ムカツかせた

様で井狩がキレた。アキラは頬を思い切り殴

られ吹っ飛び鼻血を出した。羽柴君はすぐさ

ま井狩の手首を取り、「何してんだよ？アキ

ラ何も悪い事してねえだろ。」ボクも「井狩

やり過ぎだって。アキラ大丈夫か？」すぐさ

まアキラを助け起こした。井狩は羽柴君の剣

幕に少し面食らった様で、「だってこいつへ

ラヘラしてるからムカツクんだよお。」と言

って「放してくれよ羽柴。もうやらねえから

さあ。」と懇願し、反省の色無く「アキラ早

くティツシュでも鼻に詰めろよ。汚えからよ。
。」と言って教室を出て行こうとしていた。

羽柴君は立ち去ろうとしている井狩の背後から「井狩、すぐキレるの悪い癖だぞ。良いことないからな。」まるで道德の先生のようにそう言った。ボクはアキラに持っていたハンカチを渡した。羽柴君はヤンキーの鏡だと思った。

こんな事もあった。ある日教室でハイネの詩集を読んでいると、「おいニヤニヤ。うわこいつ詩集なんて読んでるよ。」ボクは生まれつき唇が右下がりになっていて（視力は左目が悪く、右目の上の眉が左目と比べて上がっていて、心臓も右軸偏位との診断で、手首も左手が細く、とにかく右半身と左半身のバ

ランスが悪かった。」いつも薄笑いを浮かべているように見えるので仲の悪い人達からは蔑称としてニヤニヤという名前を与えられていた。声を掛けて来たのはタチの悪い不良グループの女達。「ニヤニヤ、お前ゲロっただろ。」「え、何を?」何をゲロっただろう。皆目見当がつかず困っていた。「大柴が言ってたんだよ。文科君が教えてくれたんだけどってな。」「うちらお菓子隠れて食ってましたよってゲロったよな。」大柴というのはうちのクラスの担任で中年の女教師だ。「大柴先生? 今日話してないけど・・・」

「嘔吐くんじゃねえよ。お前さっき教室のドアの窓から女子トイレの陰見てただろ。」確かに見ていた、けどそれはトイレに行った様

子の羽柴君を見ていたのだが、こいつらに言っても聞く耳を持つてくれそうも無い。其処へ丁度トイレに行っていた羽柴君が戻ってきた。「あれヤンキーっ娘揃って何やってんの？文ちゃんどうかした？」と羽柴君。「羽柴良い所に来たな。こいつやっちゃってくれよ」 「わたしらの事学校内でお菓子食ってたよって先生に売ったんだぜ、こいつ。」

「ちよつと頭良くて先生のピッキーだからっていい気になるなよ。」ピッキーっていうのは、えこひいきされている人のことだ。「まあ待てって、文ちゃんそんなこと人に言う訳ないだろ？お前らだって人から見えるところで菓子なんか食ってるから悪いんじゃないか？なんかおかしいな……。俺ちよつと職員室

行ってくるからちょっと待ってろよ。」ボクは言った。「羽柴君、あと5分で授業始まるけど・・・」「大丈夫。大丈夫。次図工ですよ。俺あの先生と話せるからさ。少しくらい遅れても怒られないから。」そう言って羽柴君は職員室に行った。ボクは知っていた。図工の先生は生徒指導も兼ねていて、普段の行いの悪い生徒には目を付けておいて、ひどい時には体罰を与える事もあるという事を。10分くらいして羽柴君が図工教室に入ってきた。「羽柴、どうした？5分遅れてるぞ。」図工の先生は言った。「いや、すみません。友達と喋ってて遅れました。」と羽柴君。「そうか、お前の事だから何か悪戯でもしよう」と作戦練ってたんだろ。トイレでタバコでも

吸ってたんじゃないだろうな？まあいい、早く座れ。」羽柴君はボクの隣りに座った。「大柴と話してきた。」羽柴君は言った。「なんか偶然女共がお菓子食ってるの見つけたんだけど、トラブったら嫌だから、文ちゃん優等生でしょ？だからついつい文ちゃんの名前出しちゃってそれで大丈夫だろうと思ったんだって。」「そうだったの・・・。」（なんでそんな事するんだ。自分で責任とればいいじゃないか。）

それ以来ボクはその女教師の指導方針に疑念を抱くようになった。「あいつらには、やっぱり吐いたの文ちゃんじゃなかったよって言っておいてあげるからさ。」

「うん。頼むよ。疑われてちょっとびっくりし

たけど・・・」

「俺に任せておいて。」

羽柴君は本当に頼りになった。このように、男の不良はさっぱりしていて漢気があることが多いが、女の不良はネチネチとしていてしつこく、陰湿でそして例外なくエロかった。

ボクはこの中学で、人生最初の岐路において、自らの要求が教師という医師と並んで

一生なれないであろうと思っていた存在（聖職と呼ばれているからだ）、今となってはどうだろう。）によって自らの進路を妨げられ

た。ボクは小学校の時の将来の夢に「サラリー

マン」と書くような少し夢のないというか、

こまっしゃくれた子供で、大柴先生には実

務的で高卒で就職する為の勉強ができる商業

系の学校の情報処理科に入りたいと言ったのだが、先生は文科君の成績ならと市内第二の進学校を薦めてきたのだった。ボクは主要五科目はいつもオール5で、合格に必要な得点もその商業の情報処理科の方が高かったのだが、その時はその女性教師の言う事を素直に聞く事にした。「はい。」と口が動いた。心底では、いやこのどこかネジの一本ゆるみがある脳みそが信じていいのかと迷い文章を反復して、「何か違う。」とサインを送っていたというのに。この進学における自己葛藤においてはもう一事情あって、同じ部活・同じ進学塾であった友達二人が「高校も同じ高校に行こうよ」と誘ってきたのだが、中二当時の私の志望校は市内一の進学校であるH学校で、

その友達達の志望校は一つ下のランクの高校だった事もあって、ボクは後々後悔するのも知らずに、例のどこか一本ネジの抜けか

けている脳みそで迷った末、友達と一緒に過ごせる環境の方が自分にとっても勉強や部活動のやりがいがあると思い、ランクを一つ下げて友達と同じ高校に行くことにしたのであった。

それなのに、この友達二人（その後会っていない。元気でやっているだろうか？）は進路決定日の直前になって、一番の進学校に志望校を変更したのである。これが後々初めての人からの裏切りとして思い出される事になる出来事だった。

裏切りと言ってもそれは信頼という片思い

的な言葉の悪い結末の一つで在ってボクはその時彼等を完全に信頼していたわけではないので（親友だとは思っていたが、前述した通り片思い的なもので実際グループ内ではたまにイジメられていた。）傷付くことに慣れる為と思えば良かったのかもしれない。結論としてボクは先生の言う通り市内二番目の進学校である、K高校を受験する事になった。合格発表は、同じ塾で同じ高校を受験した別の友達に見に行ってもらう事にした。今思えばその友達が不合格だったらどんな顔をして結果を聞いていたのだろうと思うが、ボクは自分は100%受かっているのだからと稀に見る自己中心性を発揮し、あえて発表を見に行かず少々影の薄いその代理にお任せする事にし、

家でのんびりTVゲームをしていた。予定通り
ボクは無事合格し、友達も心配していたよう
な事はなく、共に合格していた。この友達は今や
顔も名前も覚えていない。高校3年間この友達と
は一度も会話を交わした記憶がないからであ
る。

ボクは高校に入学し中学校と同じ部活に入
る事にした。ちなみにサッカー部である。ボ
クは又別の、同じ部活動に所属していて同じ
高校に入学していた勇と話していた。「なん
でもこの高校には中学でライバルだった奴ら
が四人も入学しているらしいぜ。やっぱサッ
カー部入るんだろうな。」「え、あいつら四
人が?」「なになに君達サッカー部入るの?
」前の席の男の子が話し掛けて来た。「何?

君もサッカー部だったの？」どうやらすぐに新しい友達が出来そうだ。その子はボク達が中学時代一度も勝てなかったI中学のGKだったようで、そういえば何処か見覚えがあった。こいつも相当うまい奴だ。確か……。小・中と一応レギュラーだったので目立つ奴はたいてい見覚えがある。名前は立川君といった。「じゃあ一緒に入ろうか？」ボクは言った。「いいよ」と立川君。「良かったな。早速メンバーが揃いだしたよ。」勇は言った。後は噂の四人だ。そいつらは一年から早速レギュラーだった。ボクと勇は玉拾い。いつかレギュラーになれる日を夢見て必死にサッカーボールを追い掛けていた。

ただ勉強に関しては最初から違和感を感じ

ていた。まず授業のレベルが中学とは違いく
ぎる。ボクはサッカー部の顧問教師の吉永先
生に高校入学試験の結果を聞きに行った。2
68点。悪くない。しかし順位は38位。入
学後初めて行われたテストでは内容は中学校
程度の難易度のテストだったのだが、受験の
時スラスラ問題が解けた感触や手応えは何だ
ったのだろうか？所々忘れていて解けない問
題が多い。順位は100位以下だった。これ
はショックだった。中学では10位以下に成績
が低下した事の無いボク。けれども高校に入
ればそれは中等レベルの成績なのだ。このま
まではいけないと思い、進学塾を探したが、
その頃まだボクの住んでいた市内には大学受
験を専門とする進学塾も予備校もなかったの

で、中学時代のようにF書店のSゼミ高校講座
をやってみる事にしたが、授業内容と乖離し
ている内容のテキストで、読んでみてもさっ
ぱり理解できず、国・数・英しか教材がなかったこ
ともあってすっかりおいてきぼりにされたよ
うな、自分の理解力という物はこんなものだ
ったのかという敗北感を味わっていた。こう
いうのを教育心理学ではプラトー状態と言っ
て、努力し続けると、次第に右脳と左脳が協
働状態になり、急速に学力などが伸び出す前
駆状態だそうなのだが、ボクは授業にも身が
入らず、すっかり落ちこぼれ根性が沁みつい
てしまったようだ。増進会にしておけば
良かったかもしれない。どちらでも
変わらないか。

ボクは勉強は諦め部活動に精を出す事にした。

しかし、事件が起こってしまった。ボクが

高校一年の夏、三年の先輩達が全道大会へと

進出する事が決まった高体連の遠征中、ボク

の知っている一人の先輩が一度も試合をする

事無く、海で亡くなったのだ。顧問の吉永先

生が「海では泳ぐなよ、試合前に何かあった

ら大変だからな。海パンの持ち込みは禁止だ

ぞ。」と事前に注意していたのだが悪のりの

気があった先輩達は、海があるのに泳がなく

てどうすると、レギュラーではない後輩達を

誘って海に入ったらしい。そこでまだ高校二

年だったM先輩は足をつってしまい溺れてし

まったのだ。三年の先輩達は必死で助けよう

としたそうだが、その甲斐も無くM先輩は、

救急車で市内の病院に運ばれ、そして無限の可能性と数十年という天寿を全うせぬまま、亡くなった。若干十七歳。話は勇から部の連絡網を伝って電話で聞いた。

「え、M先輩が？冗談でしょ？」「こんな事で冗談言う訳無いだろ。海に入って溺れたって。」勇が奇妙に冷静だったので信じられなかった。「そんな嘘だろ・・・。」（あのおとなしくて優しかったM先輩が・・・？）「次の人に伝えておいてくれ。それじゃあ。」

勇はそう言って電話を切った。ボクはしばらく呆然としていた。そして次の人間にどういう声色で、どんな表情で、どういう言葉を伝えればいいのだろうと考えていたが、ボクは連絡網の最後の順番だった。もしかしたら勇の

ちよつと突き放したような言い方は「おまえはこの事を他の人に伝える必要が無いからいいよな。」というつらい気持ちの裏返しだったんだろうか？正直ボクもプレッシャーから開放されたような気持ちだった。しかし先輩が死んだという事実はボクの心に頭に重くのしかかる青天の霹靂の事だった。

次の日、通夜に参列し、先輩の顔を拝顔し生前のあの大きな目、筋の通った鼻、白い肌に赤い唇、何もかもがそのまままるでまだ生きているかのようにだった。遺体を白菊で装飾しているとき涙が溢れて来た。止まらなかった。一年生の部員は生前の先輩の人柄を偲び、送迎バスの中は静まり返ったまま皆家路についた。

ボクはその晩夢を見た。入部してしばらく経ってからの事。ボクは駐輪場に立ちすくんでいた。自転車の鍵を無くしてしまったのだ。すると後ろから「どうしたの文科君？」M先輩だった。「いえ、ちよつと・・・。」「ちよつとどうしたの？」「自転車の鍵をなくしてしまつて・・・。」「本当かい？どこら辺で無くしたの？」とM先輩。「さっきまでジャージのポケットの中にあつたんです。たぶんこの場所のすぐ近くだと思ふんですけど・・・。」ボクがそう言うと先輩はしゃがみ込み、あたりの小石をじゃりじゃりとさすり始めた。「先輩いいですよ。自分で探しますから。」ボクはそれを察し言った。「いや大丈夫。二人で探したほうが早いでしょ。」そ

う言って先輩は立ったり座ったりあたりを見回したりしていた。そうする事小一時間も探しただろうか。M先輩が「文科君。これじゃないかい？」そう言って鍵を渡してくれた。

「あ、たぶんこれです。確かめてみます。」

「かちゃかちゃかちん」

ボクの自転車の鍵だった。

「良かったね。これで帰れるね。」

「ホントスイマセンデシタ。」

口をついて出た。

でもボクは本当はお礼を言いたかったのだ。

「有難う御座います。」と。そこはかとな

く他人行儀になってしまったのは、まだ知り合って間もないというのに、親身になってくれた事が嬉しくて嬉しくて、そして少し恥ず

かしかったのと、M先輩に小一時間もの間自分の失敗の尻拭いをさせてしまった事に対する申し訳ない気持ちがあつたから。お礼を言うという事は謝る事に比べて、どこか自尊心に釘を打つような、ズキズキと次第に心が痛んでくるのに対して、謝ると言う事はそれ程痛みを伴わず、真の反省と言う物がなければ案外容易く、ココロの入れ物から零れ落ちてしまう物なのではないか？ボクはそれまで心から感謝したという事がなかったのではないかという気がしていた。そこで目が覚めた。もう先輩にお礼は言えない。それはただの夢ではなかった。本当にあつた事だった。

3年生の先輩達はこの事故の責任を取る為

顧問の吉永先生と相談の上、全道大会の出場を辞退する事にし、引退して後進に道を譲る形になった。そして秋が来た。

ボクはあの親友だと思っていた二人が無事入学したH高校との練習試合に出してもらったのだが、嬉しいような悲しいかなキツかった。前夜ボクは従兄弟ののぶちゃんの家泊まりがけで遊びに行っていて、徹夜後特有の胸の狭窄感とめまいと戦っていた。

K高校のサッカー部のその年の一年生は中学の強豪校の出身者が多く、レギュラーを獲るチャンスは非常に少なかった。丁度その日ボクの狙っているポジションを務めていた光永という奴が大腸炎で試合を休んだので、ボクが代わりに試合に出して貰える事になったのだ。

ボクは必死だった。チャンスはここしかない
と。体じゃ勝てない。精神だ。風邪でも引い
たのか悪寒がする程だったが、ボクはマーク
に付けられていたM中学の2年上でキャプテ
ンだった神谷先輩を、「恨みはありやしません
が、死んでもらいます。」と必殺仕事人ばりの
気迫で削った、更に削った。ファールを取られ
ない様に、相手を倒さないようにレガースばか
りを狙って。中学で道の選抜まで行った人だ。
遠慮はいらない。本当にファールすれのプ
レイで相手の足を蹴り続けボールを安易にパス
出来ないように、ドリブルは体をブチ当てて
止めた。結局その試合は1－0で勝つ事が出
来た。試合後、吉永先生に「良くやったな。
次もあるかもしれないから準備しておけよ。」

と言われた。嬉しかった。

そこでのディフェンシブハーフ（いまでいうボランチ）としての活躍が認められあの四人と共にレギュラーとして新人戦に出場できる事になった。宇津久市・小橋一良・沢村貴文・菱田優真。勇は中学校時代DFだったのだが、四人の内二人がDFで他に元山信太という背の高い、立川君と同じ学校で同学年の奴がDFのポジションを取っていたのでポジションに空きがなかった無くレギュラーにはなれなかった。ボクは元山とも仲が良かった。学園祭で元山が新婦でボクが新郎で教壇の上で結婚式をあげるというシチュエーションがあった時等は、会場からは、「おまえらホモかゝ。」「キメエぞゝ」「本当に結婚しち

まえゝ。」「なんで新郎より新婦の方が背高いんだよ！」等々罵詈雑言とちよつとの拍手をもらったりした。ボクはその時の写真を見てどうしてこんなに顔が赤くなっているんだろうと思った。新人戦は市の1回戦は勝ったが、2回戦で市内で一番強いと目されるT高校とあたり6－1で負けた。T高校はあちこちの中学校からサッカーの上手い選手が集まる道立高校で、K高校にとっては毎年目の上のたんこぶとなる存在だった。

冬も朝5時に起き、自転車で雪の中朝練に通った。息は白く、ドライヤーで乾かしきつてない髪の毛は凍り付き、手はかじかみ、鼻毛までが凍結した。それでもサッカーの事を考える事で一層懸命になれた。朝はフットサ

ル形式の練習で、その練習は憂鬱だった。宇津さん（と同級生ながら呼んでいた。それだけ存在感のある人だった。）のチームと貴文のチームとキャプテンと副キャプテンの先輩のチームの4チームに分かれて練習するのだが、ジャンケンのチーム分けでなかなかボクは指名されないのだ。自分ではレギュラーにもなれたし、フットサルもそこそこ上手だと思っていたのだが、ボクのチーム内での位置付けというのはまだまだ低かったのだ。いつも貴文が最後の一人として指名してくれていたので、練習には参加することはできていたのは幸いだったが。5人組で行うフットサルではドリブルの力は絶大だ。貴文はまるでボールが足に吸い付いているかの様なドリブル

ができるので、2、3人を容易く抜き去りマ
ークが薄いボクにラストパスを出す。走り高
跳びに使うマットレスのゴールにシュートが
突き刺さる時、ボクは安堵する。外してばか
りいたらどのチームからも指名してもらえな
くなるからだ。だからノーマークでシュート
を外した時なんかは例え練習でもチームメー
トの皆に謝ってまわる。そんな姑息で小心な
一面がボクにはあった。貴文はおおらかな性
格なので失敗しても文句は言ってこないのだ
が。

全道大会常連の野球部にグラウンドを占領
されていて、夏場は少し離れた所にある河川
敷で練習していたボク達も、冬場は少し余っ
たスペースで試合形式の練習をする事も出来

た。雪の上ではサッカーボールはアイスホッケーのパックの様に見事に滑るので、トラップの良い練習になる。そして遊び心旺盛なサッカー少年達は、すぐにスライディング合戦になる。すっ転ばされて見上げた太陽は薄い雲がかかって、空は大気圏遥か彼方になりにけりという情景だった。ボクはああこれが青春だなあとその時感じた。そして冬休みが近づいてきて、休みの間何をしようかな？と考えていたところ、掲示板に貼られていた年賀期間臨時郵便配達のアルバイト募集の張り紙を見つけた。これは良い社会勉強の一環だと思ひ応募する事にした。午前は学校で練習をし、午後から夕方まで自転車で手紙の配達をした。20日間続けて5万円になった。高校

生のボクには大金だ。さてこの5万円をどう

したものか……。

冬休みが終わって、授業後は基礎体力向上の

為に校内でランニングや筋トレなどの練習を行っていた。

練習後たまたま一良と優真が喋っていたので話を聞いて

みると、一良が先日パチンコに行って3000円

負けたらしい。優真は優等生なので「駄目だろ。

18歳になってからだぞ。」と言ったが、一良は

1度遊んでみたかったようだ。ボクはそれを聞いてふー

んと思ったただけだが、パチンコという物に少

し興味を持ったので専門誌を買って読んで見

た。その雑誌の表紙にはスクープ永久連荘打

法発覚！という見出しが踊っていた。永久に

連荘するのなら絶対勝てるよな……。本を

見てその攻略法が本当に通用するのかホール

に行って確かめてみたくなった。私は目が細く間が離れていて、頭は大きく、鼻が低く相当の童顔だったので返って店員に見咎められるという事は高校卒業までなかった。ちなみにその容姿全てがコンプレックスで、小学生の時には目と目の間が離れているのが気になって気になって鼻に洗濯バサミを挟んでみた、中学生のときには頭が大きいのが気になって気になって服の肩の所にティッシュペーパーを詰めてみたりしていた。中学生の時分などには抜毛症にかかったり等、神経質な一面も持ち合わせていた。

その攻略法というのは残念ながら既にパチプロに荒らされていた様子で使えなかった。だが他にパチンコの専門誌には必勝法として

「ボーダーラインという概念があつて機種

毎のボーダーラインを上回る回転数ならばト

ータルでは必ず結果が出る」という点に注目

していたボクは、初めてながら隣同士の台の

命釘を比較して大きさが違う事に気付いてい

て、一番命釘が開いていると思われる保留玉

連荘機に座った。手持ちの5万円のうち1万

円分を500円玉に両替し、台に座り緊張で

震える手で500円玉を現金投入機に投入し

た。するとあろうことか誰かが隣りで打って

いると思われる、休憩中の札が出ている台の

上皿に500円分の玉が出てきた。素人丸出

しだ。人の台から勝手に玉を取るわけにもい

かず泣く泣く500円は諦め、改めて自分の

台の現金投入口に500円を入れた。玉が出

て来て、うわ、少ないというのが正直な感想だった。いくらぐらいで当たるのかは知らないがこの機種のボーダーラインよりは遙かに回る。するとトリプルラインでリーチが掛かった。見た目当たりそうだがパチンコなんて裏で店長が操作しているんだろと思っていたボクは、取り立てて期待していなかったのだが、そのリーチであっさり当たってしまった。台の下部についている板が開きそこに玉が入り下皿には玉がどんどん出て来る。最終的にドル箱一箱分出た。「あゝびっくりした。」初めての当たりの感想だ。そして四つの保留玉の消化が始まる。ボクは仕組みがよく分からないのでそのまま玉を打ち続けた。すると三回転目くらいでリーチ。これが

また当たる。どうやら大当たりは下の板が十
六回開閉すると終了するようだ。こんな感じ
でいきなり五連荘した。この機種の変荘率は
確か20%程度だった筈なのでいきなりのビ
ギナーズラックだ。その後も早い回転数での
大当たりが続き、椅子の周りはドル箱の塔に
囲まれた。結局その日は4万円勝った。10
00円が数時間で4万円。こんな簡単でいい
のだろうか。いつか痛い目に遭うのではない
かとビクビクしながらも、それからたまに
ホールへと通うようになった。結果一月目に
20万円のプラス。二月目に18万円のプラ
ス。これならパチンコって勝てるんじゃない
か?と薄々思い始めていた。

3学期の終業式、通知表をもらった。国語

が4で数学が2、あとはオール3。このままでは大学にはとてもではないが、進学できないだろう。テストの成績もその頃には300位台に落ちていた。しかしボクは体育が3なのにサッカー部でレギュラーを張っているのは凄い事だ、と自分を慰めた。宇津さんも貴文も一良も優真も立川君も勇まで体育は5だったのだから。

2年生になりパチンコの方は順調で月毎の収支ではマイナスは出さないくらいに上達していた。今思えば運も多分に良かったと思うが、今とはパチンコ業界の環境が多分に違ったのだ。業界は数年の周期を以って変化してきたのだが、その当時は脱税防止という名目の元（真実は警察OBの天下り先の確保が目

的だったのだが）ＣＲ機が台頭し始めた時期で主婦達が、パチンコ依存症になって借金苦に陥るという状況が社会問題化し始める前兆が見え初めていた。その中ボクはボーダーラインの低く利益率の良い権利物や一般電役と呼ばれる機種を中心に稼いでいた。

その事は何処から流出したのか同級生の間に知られ出し始めていた。高校生の時分なんてせいぜいお小遣い５０００円程度だ。買いたいものなんて層々買えるものではない。しかしボクは羽振り良くお金を使えた。その頃ボクはニキビが酷くなって、それを潰したりしていたものだから顔に赤い斑点がたくさんできていた。ボクはカネボウのホワイトニングやチヨコラＢＢ、コンシーラー等を買って

なんとかシミを目立たなくしようとしていた。
いい歳の男子が家でホワイトニングを丹念に
肌に塗り込んだり、毎日朝夜ビタミン剤を飲
んだり、学校の休み時間にトイレの手洗い所
に駆け込んでコンシーラーでシミを覆い隠し
たりしているのはまるで女の子みたいで、自
分でも女々しいとは感じていたが、小学生が
トイレで大便をするのを恥じるのとは違って、
人はお金を持つとまず美容に気を使いたくな
るという、大衆のCosmeticに対する潜在意識
に由来する物だったのかもしれない。

そんな理由から同級生の女子たちから持て
囃される事も在った。登校し授業が始まる前
までの時間女の子7〜8人がやって来てボク
は得意気に今使っている化粧品がどれだけ美

容に良いかを説いてやると、すっぴんの女の子たちは何故かとても喜んで話を聞いてくれる。「何処で買ってるの?」「ツルハだよ。」コンビニに化粧品なんて売っている時代じゃなかった。

「文科君ホワイティングなんてしてるんだ。」

「いくらくらいするの?」

「五千円くらいかな。」

「えゝ高い。」

「ほらボクニキビ痕すごいから、肌荒れ防ぐためにもいいんだ。」

「どこからお金出て来るの?」

「ちょっとした割の良いバイトがあるんだ。」

パチンコで稼いでいます。なんて言うところだ。伏せて置く。「でも文君いつも良い匂いするよ。」理子ちゃんだ。

宇津さんの彼女である。「そうかな・・・ア
ロマテラピーとかもやってるし、香水付けて
るからかな。」そういつて1500円くらい
の赤いビンに入った香水を理子ちゃんに見せ
る。理子ちゃんは言った。「でも香水なんて
高校生には早いよね。格好つけてるみたい。
」理子ちゃんは真面目で頭が良い。可愛い顔
してそんなこと言われるとちょっとショック
を受ける。8時30分のチャイムがなって女
の子達は走って自分達の教室に帰っていく。
ボクもわざわざ自分の教室から人の教室の前
まで来て、オカマみたいな男の話を30分も
聞いてくれる女という生き物は何を考えてい
るのかな?と思案に耽りながら教室に戻る。

同じクラスの立川君が次の休み時間話し掛

けてくる。

「いつも女の子達と何話しているの？」

「いやあ、よもやま話だよ。」

「なんか文科君って女の子という時生き生きとして話するよね。」

「そうかな・・・別に意識してないからかな。」

「ふーん僕は早く彼女作ってエッチしたいけどな。」

「彼女なんてそんないいもんじゃないよ。面倒臭いだけだよ。」

中学時代の彼女には相手から手紙で告白さ

れて付き合う事になったのだが、3日目くら

いから既に一緒に帰るのも億劫になり、そん

なに可愛くも無かったし、家に連れて来て遊

んでも何も起こることはなかった。中学生の

恋愛なんてそんなもんだ。

入学してからクラスメイトとの付き合いも

1年が経ち、親友と呼べる友達も出来てい

た。ヘーハチローだ。ヘーハチローとは入学してすぐに知り合った。教室の前に置いてあるロッカーを使おうとしたら下側の蝶つがいが壊れていたので中に入れようとしたものが殆ど溢れだしてくる。部活動のスパイクとか、ジャージとか、置き勉強するための教科書とか、食べ掛けのパンとか、昼休みに遊ぶために使うバスケットボールとかが。そうしたら出席番号隣りだと思われるカッコいい男が話し掛けて来た。「壊れてるね。そのロッカー。」「え、あ、うん」人から話し掛けられてまづ「え、あ、」というのは私の未だに直らない悪い癖だ。「俺のロッカー代わりに使っていないよ、俺、帰宅部で荷物ないから。」「え、ホント？悪いね。君、何て名前？」B型の

ボクは何でも聞きたがる。「俺？大塩だけど

。」「大塩・・・ヘーハチローだね。」「い

や名前は違うけど、ヘーハチローでも別にい

いよ。」どうみても女子の人気を独り占めし

そうなクールな風貌の男がヘーハチローなん

て格好悪い名前で呼ばれる事を許可するとは

意外だったけど、カッコ良い友達がいるとい

うのは一つのステータスだと思って、「じゃ

あ、ヘーハチローって呼ぶね。」「ああ、いい

よ。」

後一人親友がいた。猛だ。猛は陸上部で足

が速く、猿みたいな顔をしていて背が小さか

った。しかし陸上7種競技で全国大会まで出

場する程の運動神経を持っていた。イケてる

男とスポーツ万能の男。どちらも友達にして

おいて損は無いタイプだ。猛は顔が広いので立川君と信太とも仲が良い。立川君の家に頻繁に泊めて貰って一良と優真もよんで交代

で朝まで麻雀をして遊んだ。ある時、猛の後ろで手牌を見ていたらどうやら麻雀素人な彼はマンスで染めようとしているらしかった。

猛はボクに小声で「これテンパってるよね。待ち何？」と聞いてきた。清一色ではよくある

事だ。「どれどれ」って覗き込むとそれは九

連宝燈の聴牌ではないか。「猛、一だよ、一

」と他人の事ながらちよつと興奮気味に小声

で教えた。猛は役満だとは知らない。すると

海底の一巡前に一万を自分でツモった。「猛、

それ役満だよ。九連宝燈。」「うっそ。マジ

で？」ボクがいるので、レートは千点二百円

だ。他の面子が覗き込む。「うわ、ホンモノだ。」立川君が言う。信太は親だったので二万四千点の支払い。「えゝ俺飛んだよ。お金ないよ。」信太にはボクが金を貸す事になると思う。高校生活三年間、金はボクからみんなへという流れだった。ずっとそうだったの
で別段おかしな事をやっている意識は当時、私にはなかった。優真が言う。「でも九連宝燈あがった人はその日に死ぬって言うよね。」「えゝマジ、優真君?」「迷信だよ、迷信。それだけ珍しい役だって事だよ。」ボクは猛に教えてやった。「なんだ・・・それならそうと言ってよ。優真君。さあ一万二千字払って、払って。」そこで「ねえ、そんなに珍しいなら写真撮っておこうか」と立川君

。携帯電話等まだない時代だった。立川君はポラロイドカメラを持ってきて、猛の手牌を写真に収め猛に渡した。「良い記念になるよ。」ボクは言った。

修学旅行でも二人とは一緒のグループだった。三泊四日の予定。ボクは飛行機に乗るのが初めてだったので前日は緊張してよく眠れなかった。学校からバスで空港に向かい飛行機に乗る。隣りの席はへーハチロー。しかしコイツは男のボクからみても惚れ惚れするほど美形だ。横顔を暫く見つめていると「文科何処行くの楽しみ？」へーハチローが聞いて来る。「うーん、普通に京都の清水寺か、奈良の奈良公園かな・・・？」へーハチローが、はぁ？という顔で「そんな所行って何が楽

しいの？。俺は大阪のアメリカ村だな。東京にも寄るスケジュールだから渋谷にも行ってみたいな。」裏原なんて言葉もまだ当時なかった。ファッションには人一倍敏感な彼だ。その日もいつものボブみたいな髪型からベリーショートにしてきていた。「田舎者だと思われたくないからね。」ヘーハチローは言った。田舎者丸出しのボクは返す言葉もない。

「えびすジーンズ欲しいんだよ。ミリタリー系のジャケットなんかもいいな。」ファッション雑誌を捲りながらそういう彼に「ケミカルジーンズでいいよ。」ボクは言った。又はあ？という顔で「何言ってるの？苛めるよ？」「いや冗談だよ、少しダメージの入ったジーンズがいいかな。」「そんなの流行らないよ

。だらしないな文科。」”でも今では流行っている。”「まあ自由時間2日目と4日目にし

かないから、最初大阪で次東京だな・・・。

「ヘーハチローは再びファッション雑誌に目を落とした。

そうしている内に目的地である関西国際空港

に到着した。そこから奈良公園にバスで向かった。

大型バスの先頭で美人のバスガイドが地域の特徴

等を話していたが、他のクラスと一緒にって行動しているので近くに友達がいらない。

ボクはMDプレイヤーを作動させB、Zの「love me. I love you」

を聴いていた。ぼんやりある女性の事を考えていた。

「はいこちらが奈良公園、到着になります。」

みんなバスから降り出した。ボクもMDプレ

イヤーを停止させ、友達達と合流した。「この

修学旅行終わったら選手権大会だな。」と勇。

「そうだね。」

「俺の分まで頑張れよ。中学では俺の方が上だったのにな。」

「しょうがないよ。信太と優真とよっちがいればディフェンスは万全だからね。」

「FWでは通用しないしな……。まあスーパーサブで我慢するよ。」

「スーパーサブね……。練習試合ではいい働きしてると思うよ。」

「本番に弱いんだよね。何やってもそうだから参っちゃうよ。」

奈良公園では早速集合写真を撮った。私は

未だに写真という物があまり好きではない。

決して自分が醜いからではない。人は必ずい

つか死ぬのに、死んでからまで思いを馳せら

れたくないのだ。写真というものは現在と未

来とを繋ぐ物だろう。しかし現在は今既に過

去で取り替える事が出来ない。そういう生き
ていた証拠が残ってしまうのが嫌なのだ。後
日見た時にはボクはそっぽを向いて照れくさ
そうに笑っていた。足元の新品のズック靴が
やけに光っていた。猛は僕の隣りで鋭い視線
でカメラを睨み付けていた。ヘーハチローは
彼のお茶目な性格を現すように隅っこでカメ
ラにちょっと気障っぽい流し目を送っていた。
背の高い勇と立川君は最後列のど真ん中で子
芥子人形の様に棒立ちで並んで写っていた。

鹿がたくさんいたが、しかしそれは大した
問題ではない。問題は鹿の糞の臭いだ。仕方
なく鹿煎餅を差し出すとすぐに沢山の鹿が寄
ってくる。こう見ると雄鹿の角は切られてい
るし、結構可愛い。ヘーハチローはどうでも

良さそうだったが。

東大寺大仏殿の奈良の大仏は昔から何故パンチパーマなのかと思っていたので、近くにいた神主さんに聞いてみると「あれは螺髪と言って仏像の丸まった髪の毛の名前だよ。三十二相八十種好のひとつだよ。」と教えてくれた。信仰心などまだ持っている歳でもなかったし、もっと面白い理由があるのかと思っていたのでちょっとがっかりした。団体行動もお決まりのところにしか行かないので案外疲れるなあとその時は思った。

その日は大阪に宿泊する事になっていた。次の日は大阪で自由行動の予定だった。夕食はビュッフェだった。実に美味しかった。

あのローストビーフは絶品だった。滋賀の近江牛

を使っていたらしい。

さあ宿泊実習とは違って消灯時間などない。先生が

1度見回りに来た。これからが楽しい時間だ。

積もる話もある。猛とヘーハチローと立川君

が同室だった。猛は「俺、女の子の部屋行っ

てくる。風呂上がりの女の子の匂い嗅ぎたい。

」そう言って部屋を出て行った。「先生に見

つからなければいいけど」立川君は心配そう

に言った。「大丈夫だよ。しかし猛は裏切り

者だな。修学旅行と言えば好きなコの話する

のが定番だろ。」自分で言っ”しまった”

と思った。立川君がいる所でそういう話は巧

くない。ごまかすように「ちょっとホテルの

中見て来ない？」2人に促した。「いいけど、

何見るの？」2人が聞いてきた。「わかった

あれだろ？」ヘーハチローが悟ったようだ。

「そうだよな、話をする前にまず1杯だよな。」

「うん、それ。不味いかな、立川君？」

「1杯ってお酒？ヤバくない？」

「心配？立川？大丈夫。この袋に入れてくるから。」

そう言ってヘーハチローは不透明の大きなコンビ

ニ袋を立川君に見せた。「見つかってでも誰か

バス酔いで吐いたっていえば誤魔化せるよ。

「ボクは言った。「でも、あれってビールのサ

ーバーかな？炭酸で袋破けないかな？」「あ

あ、さっき味見してきたよ。ポタポタ滴が垂

れていたから。ウイスキーのサーバーだよ。

色も誤魔化し効くだろ。」ヘーハチローは言

った。僕らの部屋のすぐ近くの不自然な所に

そのサーバーは在った。どうやら奇妙な間隔

であちこちに設置されているようだ。サーバーはプラスチック製でコックをひねるとウィスキーが出てくるタイプの物だった。

「さて袋をセットしてコックを捻ると・・・

・」 「へーハチローお金入れてないぞ。」 ボクが言う前にウィスキーは袋の中に注ぎ込まれていく。「あれ、お金入れなくても出てくるぞ。壊れてるみたいだな、これ。飲み放題だわ・・・。」 何しにコイン投入口付けてるんだろ。ボクは思った。新しいホテルなのにそのサーバーだけ古臭い。中古品だろうか？ 「ラッキー、ラッキー。古臭さ結構、結構。」 へーハチローは新し物好きだから皮肉を込めながらもその顔は嬉しそうだ。

見つからないようにこっそり部屋に戻り、

ドアノブにウイスキーの入った袋をぶら下げる。そして昼に買ったコンビニ弁当の割り箸に付いていた爪楊枝で袋に穴を開け、空の1・5リットルのペットボトルを下に添える。だいたい半分より少し多いくらいになった。

「これだけあれば十分だろ。さあ飲もう。2人とも水筒出して。」そこで立川君が言った。

「僕やつぱりいいよ。2人で飲んで。」

「え？飲まないのじゃあ文科水筒出して。」

「あ、ゴメン。ボク水筒持ってないや。回しのみしようよ。」

「は？やだよ。男と間接キスする事になるじゃん。」

御免だね。立川、文科に水筒のコップ貸してやって。」相

変わらずボクには忌憚なく文句をつけてくるヘーハチロー。

仲良くなると図々しくなる、顔の良い奴の

嫌な特徴だ。「じゃあ悪いけど立川君、コッ

プ貸してくれる?」「いいよ、僕使わないか

ら。」彼の両親に似て立川君は誰にでも分け

隔てなく優しくしてくれる。その人の良さが

彼の良い所でもあり、弱点でもある。立川君

の出来たばかりの彼女はお世辞にも可愛いとは言えない。ニ

キビ面で器量は悪い方だ。そんな彼女も自分

にはお似合いだと仲睦まじくしている。とに

かく不釣り合いに可愛い娘ばかり好きになるボク

とは、根性が違う。男にも優しい立川君は同

性からも好かれる。

それから話し込む予定だったが、ヘーハチ

ローは酒がそれ程強くない。

「俺、教育実習に来た女と付き合っているんだ。」

「ヘーそうなの?すごいね。どのくらい進んだの」

「どのくらいって相手22歳だぞ。あんな事やこんな事だって・・・」

」

「あんな事やこんなことって？」

彼女のいないボクだ。友達がどんな異性と

どんな交遊しているかは気にはなる。

「あんな事やこんな事ってそういう事だよ。

あゝ酔いが回ってきたかな、そろそろ寝るわ」

まだコップでウイスキーを2杯しか飲ん

でいない。色男金と力はなかりけり。英雄は

酒を樽ごと飲む。張飛がいい例だ。へーハチロ

ーはそのまま寝てしまった。ボクはその後コッ

プで五杯くらいウイスキーを飲み、仕方ない

ので立川君と話した。

そこに猛が帰って来た。「おお、猛。女の

子の風呂上がりの匂いはどうだった？」から

かうようにそう聞いてみた。どうせ軽くあし

らわれて来たんだろう。そういう顔を猛はし

ている。「いや、UNOでもやらないかい？

なんて軽い感じのノリで行ったんだけど。」

猛は「女って鋭いね。やだ、お風呂上がりに

私達どんな姿でどんな事してるか見に来たん

でしょ。やらしい。猛くん。なんて言われて

さあ。」続けて「仕方ないから、入れて上げ

る、UNOしに來ただけでしょ？そう言われ

たからUNOだけして帰って來た。」「女の

子の浴衣姿どうだった？」ボクは猛に聞いた。

「浴衣なんて着てないよ！みんなジャージ姿

さ。女の連帯感と第六感は”罪”だよ。」

「じゃあ、風呂上がりの匂いも何もないね。覗

き魔に対する女の仕打ち。Hな男に”罰”を

与えたかったんじゃない？」「罰を受けるよ

うな事は何も出来ていないよ。それより酒臭

いな。誰か飲んでる？」猛は怪訝そうに聞いてきた。立川君が「文科君と大塩君がちょっとね。文科君はちょっとじゃないか。だいぶ酒臭いけど大丈夫？」心配そうな立川君。

「大丈夫、大丈夫。実は中学生の頃から叔父さんの進学塾でテストの打ち上げと称して酎ハイとかで乾杯してたんだ。叔父さんには内緒だけどね。顔も赤くないでしょ。飲むと顔が青くなって吐き気がする前に眠りに就いちゃうんだ。でもだいぶ酒が回って来たみたい。眠いや・・・」何時の間にか23・00になっていた。「これから恋話に花を咲かせる予定だったのになあ。しょうがない。明日自由行動だしそろそろ寝るか。ねえ立川君。」「そうだね。」「おやすみ・・・」ボクはすつか

り酔っ払った様子で言った。

次の日、いよいよ自由行動開始。へーハチローは早速アメリカ村へ。次に心齋橋筋商店街。

二箇所でえびすジーンズばかり五本買った

。呆れた。二日酔い気味のボクはお腹がすいた

ので道頓堀行こうよ、と皆に提案した。「買

う物買ったしイイよ。」へーハチローはご機

嫌。他の皆はボクと同じでお腹が空いているら

しく道行く人に方向を聞きながら道頓堀に向

かった。その先はパラダイス。人の多さは同

じくらいなのにアメ村みたいな不潔な感じは

全くしない。これぞ繁華街。「あ、かに道楽

の看板、グリコのランナーのネオン。」大阪

に来たんだという実感が湧く。「あれが戎橋

だよ。ナンパの名スポット」へーハチローが

言う。「よく知ってるなそんな事。」「観光

雑誌で調べたからね。田舎者だと思われたら

嫌だから。」また言ってる。「まず大阪とい

えばたこ焼きでしょ」たくさんあるお店の中

からへーハチローがお薦めだというたこ焼き

店で買い食い。「うまい。」

まるで今まで食べてきたたこ焼きはたこ焼き

ではなかったようだ。外はカリっとしていて

中はトロっと。タコは生地からはみ出さんば

かりに大きい。「美味しいね、立川君、猛。」

「うん、こんなの食べたの初めてだ。」2人

は声を揃えて言った。「そうだろう、俺のお

かげだな。」へーハチローは結構調子に乗り

易い。それだけでは足りなかったのでお好み

焼きも食べた。

「あ、そろそろ3時だ。集合時間だよ。」

「ほんとだ。」「集合同所行なくちゃね」

僕はタクシーの相乗りで集合同所に向かった。タクシーのおじちゃんはコテコテの関西弁でまくしたててきた。「修学旅行生やろ。どうやった。大阪。」「楽しめました。最高です。」「そやろ、そやろ。大阪は最高の街やで。ここは良いとこ一度はおいでってな。」

「そうですね。また来たいです。買い物と

か。」へーハチローが言った。「なんやあんたらくらいの歳なら、アメ村行ったんか？」

「はい。」「カラまれへんかった？あそこ最近治安悪いからな。」やっぱり……。ちょっとガラの悪いお兄ちゃんに道を聞かれたし

。よそ者って分かってやってるのだろう。少

しびびった。

その夜ボクは眠れなかった。また少し緊張しているのか、ホームシックにでも罹ったか。

幸いへーハチローが起きていて話し相手になつてくれた。「明日、京都だな。」「うん、

清水寺と金閣寺見るんだよね。」「退屈だな

。寺なんてじいさんが見て喜ぶものだよ。」

ボクは事前に勉強してきた清水寺と金閣寺につ

いての蘊蓄を語ってやろうかと思ったが、機

嫌を悪くさせたら嫌だなと思って止めた。

「そうだね。清水寺って自殺する人が多いんだって。」

「清水の舞台から飛び降りるってやつ？木に引っ掛かって失敗したらどうするんだろ？」

「わからない。どだい自殺する人の気持ちなんて全然分からない。」

「童貞には分からないよ。その内少しは分かるさ。」

「なんで童貞だって分かるの？」

「あ、童貞だったんだ。カマ掛けただけだったんだけどな」

「なんだよそれ。意地悪な奴。」

「文科はブサイクのくせに女に人気があるからなく。なんでだろ。」

へーハチローみたいな顔の奴に何が分かる？ボクはそう思った。

いつの間にか寝ていたようだ。今日は京都。

少し早目の6…30分に起床。集合時間は

8…30分。洗顔し、歯を磨き、髪を洗って

ロビーに向かうと何だか騒がしい。引率の先

生7人が「はい、全員集合！」と生徒に声を

かけている。なんだろう。嫌な予感がした。

先生の1人が言った。「昨日普通科で3人、

英語科で1人、飲酒が発覚した。」ドキッ。

でもボクらが飲酒したのは一昨日のはず。「女

子生徒も数人混ざっていたようだが飲酒はし

ていないそうだと。飲酒したのは男子生徒。飲

酒していた者は強制帰還させる事に決定した

。その後の処分は修学旅行終了後検討する。」

誰だろう？可哀相に。一歩間違えばボクらがそ

の憂き目に遭っていたかもしれないのだ。そ

の時ボクは知る由もなかった。飲酒していた

のがあいつらだったなんて。

京都に入った。京都は国宝や文化財が豊富だ。

金閣寺を見て一句「金閣寺 光り輝く 太陽を

超える栄華が 今はうたかた」

「金閣寺は一度燃えちゃってるからね。」立川

君から賛同を得た。「でもありがたみがあるよ

。いくらかかったんだろうね。作り直すのに。」

清水寺を見てまた一句。

「清水と 名付けた気持ち 裏腹に 悲しき人の

死に場所となる。」

「怖いよな。こんな高い所さ。清水の舞台から飛び降りるなんて言うけど正気の沙汰じゃないよな。」勇は高い所が苦手らしい。

京都には今まで行ったところにはない独特の雰囲気があった。まるでタイムスリップしたかのように都として栄えていた頃の面影を残している。戦火の匂いがしない。碁盤の目の様に区画された中心部は上からみたらきつと要塞都市に見えるだろう。守りが堅かったに違いない。信長が上洛したときも京の街に好感を抱いたのではないか。彼はサデイスツティックで新し物好きだったが、さすがに都に入ったときには感慨に耽っただろう。「おい、何呆然としてる？退屈で眠くて帰りたくなっ

たか？」へーハチローが思索に耽っていたボクに少しイライラした様子で声を掛けてきた。いや、信長がね……。と言おうとして止めた。

その日は京都市内のホテルに宿泊する事になった。お風呂タイム……。苦痛だ。今までクラスメートとは入らないようになんとか誤魔化してきたのだが、へーハチローと猛がどうしても一緒に入ろうと言うので立川君と信太と勇もくっ付いてきた。勇が言う。「文科

、他の人と風呂入るの嫌なんだろう？」勇とは中学時代修学旅行で一緒に風呂に入ったことがある。

「そんな事ないよ！」少し怒って言った。

「またまた、どうせまだ治ってないんでしょ。

包茎。」ボクは顔がパーッと赤くなった。

「いいんだよ。仮性なんだから。」少しテンション下がり気味でやっと答えるボク。

「へえー、それでも少しは剥けたんだ。真性だと思ってた。」

ボクは他の人の性器を見るのが嫌で、自分を見られるのも嫌で、何とか水風呂に十分も浸かり、頭だけ洗って風呂を出た。けれどもボクのオチンチン（そう表現しなければ。カワイイ奴なんだから）にはまだ誰にもバレていない秘密があった。「文科。唇紫色だぞ。大丈夫か？」へーハチローが言った。「いや水風呂って気持ちいいんだよ。すっきりしたよ。」体をブルブル震わせながらそう言った。

最終日、ボクは風邪を引いた。東京巡りは諦めなければならなかった。「文科君、じゃあね。」

お土産話飛行機の中で聞かせるよ。」立川君がそう言って、続けざまにへーハチローは「お前は東京は似合わない。コンクリートジャングルは将来の俺のアジトだからな。」そう言った。

「お大事にね。」「馬鹿だな。」猛と勇が半分背中を向けて部屋を出て行った。眠くなる風邪薬を保健の先生に貰って飲んで、午後まで寝た。

時間になったので引率の先生がタクシーを呼んでくれて、その足で成田空港へ向かった。機内では「行きは良い良い帰りは怖い。」離陸する時吐き気がした。

「東京凄かったな。流石の俺も圧倒されたぜ。」

「ほんと、日本の首都って感じ。」

「俺は2度と行きたくない。田舎物の集まりだ。」

「猛、嫌な事でもあったの？」

「女に道聞かれた。わかりません。って言った
ら田舎猿にはわからないかって言われた。」

「うつぶ、その娘も田舎者だろうね。東京は

地方出身者の方が多い。慣れないうちは皆冷汗
かいてるのさ。」東京巡りでできなかったから皮
肉を込めてボクは言った。

空港に着いた。皆それぞれ親が迎えに来ている。
ボクには迎えは来ない。

父は単身赴任。母は精神科に入院中。姉は東

大の理？。家に着いても誰もいない。一人暮らし
にもすっかり慣れた。

荷物を整理して風邪薬を飲んで寝ることにした。

「明日は学校休みか……。ああ疲れた。」

「夢」を見るだろうか。楽しかった修学旅行の

「夢」を。

翌々日登校日。つまらない授業を終え、部

活動を行っている河川敷に自転車で向かう。

「あれ？吉永先生がいる・・・。」

サッカー部の顧問の吉永先生はサッカーをし

た事がないので、基本、練習メニューは先輩達

が決める自主練習だ。何かあったのだろうか？

嫌な予感がした。

「先生どうしたんですか。」自転車で土手を

駆け下りて努めて明るい口調で尋ねた。

「佐藤、話があるから全員来るまで待ってろ。」

「え、はい。」

しばらくして全員が集まった。何か悲痛な表情

をしている部員がいる。先生もそうだ。みんな

吉永先生の顔をじっと見つめている。先生が話し

出した。

「残念だが、先日の修学旅行で我々サッカー部の部員の飲酒が発覚した。処分は二週間の停学と部の三ヶ月間の対外試合中止。」

え、それじゃ先輩達は・・・。

「我々は選手権大会に出場できなくなった。」

飲酒したのは宇津と小橋と沢村と菱田だ。」

まさか・・・あの四人が・・・。

キャプテンが言った。「俺たちの夏は事実上終わった。しかし飲酒した四人を責める気はない。何かの間違いだと思ったが。」

そう言ってキャプテンは涙ぐんだ。

ボクも飲酒していた。見つかっていればボクが責任を取らなければいけなかった。いつそカミングアウトしようかとも思った。でもそんな事したら一層事態が悪化する。立川君も静か

にうつむいている。

吉永先生が言った。

「こんな事になって非常に残念だ。今年はその四人の活躍があれば全国大会にも進出可能だと思っていたんだが。三年生のみんなすまん。そして一年生、来年同じ様な失敗を繰り返さないでくれ。」搾り出すような声だった。宇津さん達の事も心配だ。どんな罪悪感に苛まれているだろう？先輩達最後の試合の機会を戦う前に奪ってしまったんだ。誰よりサッカーを愛していた四人。先輩達の期待の星だった四人。許すとか許さないとかじゃない。M先輩の時と同じだ。真っ暗。部員達の表情がそれを物語っていた。

停学明け宇津さんは荒れていた。理子ちゃ

んと別れたようだ。修学旅行中飲酒をした時に一緒にいた女子というのに理子ちゃんが含まれていて、彼女は止めたのに、宇津さんが聞かなくて停学になったものだから「嫌い」と一言。それで終わったらしい。

「文っち六万円貸してくれるかな。」

トイレで小便をしている時に言われた。「いいですけど。何に使うの？」怖いので断れない。「スクーター欲しくて。必ず返すから。」

あてにはしていない。貸さないと試合中何言われるか分かった物じゃない。ただそれだけかもしれない。

財布の中に今日の軍資金とプレイステーションを買う為のお金が入っていたのでそのまま全部貸した。結局その時のお金はまだ返ってきてい

ない。まあ今考えれば安いものだ。宇津さんと

理子ちゃんが別れてくれたのだから・・・。

ボクは高校三年生になった。理子ちゃんの事を

意識するようになった。しかし忌まわし

い事件がまた起こった。

第二部（前書き）

第二部って程長くないんですけど締め切り近いんで。
ちなみに一部と違ってほとんど嘘です。

第二部

姉さんが東京から帰ってきた。

「文科、父さんの具合はどうなの！」

「それがね・・・。」

父さんは単身赴任先の寮で割腹自殺を試みた。

姉さんと二人ドクターから説明を聞いた。

「警察の話ではお母様が発狂された事を苦にした事による突発的な行動だったようです。

手術は成功しました。お父様は腹部を十字に切っており、臍部の周辺は痛みが強かった為か傷はそれ程深くなく小腸へのダメージは少なかったのですが、大腸が深く傷ついており一部摘出せざるをえませんでした。これからオストメイトとして暮らして行く事を余儀なくされるでしょう。」

オストメイト……。介護の仕事に興味を持っていたボクには多少知識があった。オストメイトとは人工肛門・人工膀胱保有者の事で、腸の疾患、外傷等の為、腸の一部を切除し、腸の切断端を体外に出して腹壁に固定して、便を体外に排出するようにした人工の排泄口（ストーマ）の事でパウチの中に便を溜める。

「これからどうなっていくのでしょうか？」

姉さんは医師に聞いた。

「腸内洗浄という方法があります。それを行えば便をしばらくの間排泄しなくても善くなります。ただ極度のうつ状態で精神科で診てもらったほうが良いでしょう。職場復帰はそれからです。」医師はそう告げた。

「どうして家ばかり……。」「

「姉さん心配しないで。お金ならボクが稼ぐから。」努めて明るい口調で言った。母さ

んが発狂したのは三年前。ボクが受験を控えて

大事な時。あの時はとにかくレベルの高い高

校に入って姉さんみたく東大を目指したかった

。しかしボクはボンクラだった。家庭環境のせい

にして怠けてばかりいた。それで精神のバラ

ンスを保っていたのかもしれないが。姉さん

は市内で一番だという進学校に入って必死で

勉強していた。小説家になりたいといつも言

っていた。母さんの事があって私もそういう

病気になるかもしれないと脅えていた。発狂

する前の母さんの様子を見ていればそうなる

のも仕方がなかったかもしれない。

部屋にこもって耳栓をしてプルプル震えて何

か呟いている母。

両手を合わせて高く伸ばし念仏を唱えている

母。

私は不貞を働いたからエイズになったという

母。

最後には素っ裸で家を飛び出して警察に保護

された。

ボクと姉はその様子をリアルタイムで見ている。

姉が精神分裂病（今は統合失調症と呼び方が

変わったが）という病気に恐れを抱くのも仕

方がない事だったかもしれない。

しかしボクは気にもとめていなかった。姉は

ガリ勉で友達も少ない様子だったが、僕には

仲間と呼べる存在がいたから……。ただボ

クは土壇場で捨てられる悲しい道化師で、相

手は完全に心を許してくれていなかったかもしれない。一方通行な好意。ボクのテーゼなのだろうか。

父さんは精神科に入院することになった。

姉は東京に帰って勉強を続けるという。バイトしながら。高校卒業までに必ず百万円渡すからと約束をして別れた。家には父方の祖父が常駐する事になった。

もうヨボヨボで頼りになりそうもなかったがそれでも晩ご飯だけはいつも用意してくれていた。ボクは学校と部活を終えたらパチンコで稼がなければならず家に帰るのは十一時は必ず過ぎていたが、爺ちゃんは必ず起きて待っていて夕食を食べなさいと言ってくれた。

わかばを吸っていて痰がからむのかいつも咳

払いをしていた。ゴホン、ゴホンと。味噌汁に痰が混入していた事があった。さすがのボクも泣きそうになった。自分が可哀相だと感じた。不条理は感じるが、自分で自分を抱きしめたい気持ち、そんな感情を味わったのは初めてだった、かもしれない。

学校でも辛い事があった。クラス替えで勇とも立川君ともヘーハチローとも猛とも違うクラスになってしまったボクはいきおい孤立しかけていた。

ある日突然の事だった。ヘーハチローが「文科、俺お前と友達止めるわ。」と言ってきた。

「え？なんで、なんで？」

「俺バイト始めるんだ。社会勉強しなきゃ。」

お前みたいにその場しのぎで将来の事考えて
無い奴と付き合ってたら損をする。」

確かにそう言ったが、聞いたところによる

と、ブサイクなのに女が近寄ってくるあいつは

許せない。俺とは住む世界が違う。顔が嫌い

なんだ。あいつと付き合ってたら顔の良い俺

が損だ、と損をするのは同じだが、どうやら

ボクのルックスが気に入らないらしかった。

驚いた。そんな理由で友達関係を解消しよ

うなんて言う奴だとは思ってなかった。それ

からは話し掛けても返事をしてくれなくなっ

た。「なんで？なんで？」そればかりだった。

それからボクは部活に以前にも増して打ち

込むようになった。正直マイツテイタ。部活

の友達だけが、サッカーが心の支えだった。

春の高体連予選、忘れもしない二回戦市内最強とうたわれるT高校にボク達は1－0で勝利した。今思えばこれが人生で一番楽しく幸せで栄光に満ちた1日だったかもしれない。ボク達は破竹の勢いで全道大会に出場した。優勝は出来なかったが夏の高体連のシード権を獲得した。

そして夏、進学校に在籍する僕らにとって事実上最後の大会となる高体連が始まった。2回戦。相手はまたも因縁の市内最強T高校。炎天下の中の試合だった。前半を終えて0－0。疲労はピークだった。汗だくで頭がポ－っとした。

ピー。後半開始のホイッスルがなった。とにかく走りまわろう。そう思っていた。勝たな

きゃ。絶対。いや勝ちたい。

しかし思いとは裏腹に得点のチャンスは来な

い。圧倒的に攻め込まれ防戦一方のボク達。時間

がどんどん過ぎ去って行く。みんなギリギリ

だ。応援してくれる人達の気合さえ絡みつく

糸の様に脳みそを不快に刺激するように感じ

た。このままでは負ける。PKに持ち込むし

かない。

立川君のスーパーセーブがなければゆうに3点

は取られてる。

一良も優真も信太も最高のパフォーマンスを

発揮している。後10分、5分、3分、2分、

1分。ロスタイムが恐ろしく長く感じた。ピー。

後半戦終了の合図だ。勝負はPK戦となった。

順番は優真、宇津さん、貴文、ボク、一良の

順に決まった。どちらのチームも3人目までは
無難に決め、ボクの順番が回ってきた。

右に蹴るか左に蹴るかボクは迷っていた。優真
はど真ん中に決めたがボクにはそんな勇氣は
ない。とにかく丁寧にコーナーについて、そ
う考えていた。少し助走を長めに取る。これ
は思い切り蹴ると見せかけるためのカモフラージュ。

G Kの目をジーっと見つめた後「ふー」とた
め息をついた。決める。走り出す。左足の踏
み込みはゴールマウスの左側を狙う為に左に
向ける。そう見せかけた。

右サイドにインサイドキック、頼む。蹴った。
きつちり右端のギリギリにコントロールされ
たボールの行方を確かめると同時にG Kが右に
飛ぶのが見えた。しまった!と思った時には

ボールはゴールマウスから弾き出されていた。

「外した・・・」

みんなの所へ戻る。宇津さんに一言「文っち、弱いよ。読まれてた。」静かにそう言われた。

T高校の4人目は決めた。一良も冷静にネットを

揺らした。最後5人目。立川君が止めてくれ

ればサドンデスになる。（止めてくれ。頼む、

立川君！）

ボクのせいで負ける。それはあつてはならない事だ。また捨てられる。怖い、そう思った。

T高校の5人目がボールをセットする。そしてホイッスルが鳴る。思い切りシュートした。

立川君がボールと同じ方向に飛ぶ。止めた！

そう思った瞬間、立川君の手を弾いてボールはゴールマウスに吸い込まれた。

ボクはフラフラとベンチに戻る。「みんな良くやったな。」吉永先生が言った。

貴文と一良と優真と信太がやってきて「この下手くそ!」と言って肩を抱いてくれた。ボクは泣いていた。

宇津さんは慔然とした表情で、それでもみんなに「俺の責任だ。ストライカーが

一点も取れないんじゃない。負けても仕方がない。」そう言った。

誰もボクを責めなかった。逆にそれが辛かった。

秋、最後の集合写真を撮った。みんなで決めた、みんなの汗がしみこんだ

ユニフォームを着て最後の……。ボクはいつちよ前の男の顔になっていた。

冬、それぞれがそれぞれの道に向かって歩み始めていた。

ボクの初体験の相手、それは幸か不幸か理子ちゃんだった。

理子ちゃんは既にM大学への推薦入学が決まっていた。ボクはと言え

ばセンター試験の成績が最悪でどこの大学にも入れそうにもなかった。

そんな時、猛が顔の広さを利用して息抜きに自分の家でパーティでもしようと言ってきたのだ。

男女合わせて十人くらい集まっただろうか。その中に理子ちゃんもいた。

知らない奴もいた。でもボクの事は知られていた。「パチンコで稼いでる

文科君だ。」

もうボクの代名詞だ。猛はサッカー部のあの事件を知っていながら懲りずに

酒を出してきた。

「飲もうぜ。」

若者はどうしてルールを破る事に快感を覚えるのだろうか？

ボクも同じ穴のむじなだ。

「私も飲もうかな。」意外な事に理子ちゃんがそう言った。

進路が決まってハメをはずしてもよい気分だったのだろうか？

しばらくするとさっきまで顔も知らなかったような男女もキスしたり

猛に至ってはベッドに入り女の子と何かゴソゴソやり始めた。

肝心の理子ちゃんはというと酎ハイを一杯飲んで、吐いていた。

下戸らしい。

「文科くーん。膝枕してくれる？気持ち悪くてー。」甘えた声でそう言われた。

髪を撫でてあげた。気持ち良さそうにしていた。男女達の行為はエスカレート

していた。

「理子ちゃん出よう。」ボクは意を決して言った。

「うん。」

タクシーを拾って「近くのホテルまで」そう言った。

私は今もこの時の一言を後悔している。女を知るんじゃないかと。

2人はシャワーも浴びずに求め合った。彼女はB型だ。ホテルに備え付け

のコンドームの占いでは「B型同士はSEXをスポーツのように楽しめるでしょう。」

と書いてあった。

無我夢中で、高濃度の酸素の中にぶちこまれたような爽快感と、男

女の湿った

くぐもりの不快感。

そして終わった後の喪失感。全てを知ったような気持ちになっていた。

2人はこの世の終わりを明日に迎えたかのように震える心を重ね合わせ

眠りについた。

早朝、僕は二万円を支払い、先にチェックアウトした。寂しかった。

とても寂しかった。記憶は泡沫の夢。朝方、橋の上から見下ろした線路

を走る列車に「ウォー」と叫んだ。

卒業してから理子ちゃんに会うのはそれから何年も後の話だ。2人の

関係は1夜限りに、ボクがそう望んでいたからだろう。

実は理子ちゃんとSEXする時は僕は部屋の電器を消した。

「恥ずかしいでしょ。」

そうは言ったが僕のおちんちんの秘密に気

付かれたら確実に嫌われる。それは性病なのだが

尖型コンジロームだとばかり思っていた。感染したら

困るから、もちろん僕はその時童貞だったので

どうして性病に？という疑問もあった。10年くらい

経ってようやくフォアダイスという害のないぶつぶつ

だという事を知ったのだが。日本人男性の30%くらい

が思春期には発症しているらしい。

それにしても理子ちゃんが処女だったというのには

びっくりした。宇津さんと2年も付き合っていたというのに。

破瓜の出血はなかったのだが確かに処女だと言った。

テニスをやっていたので激しい運動をしたから破れたらしい。

スコートに血がついていたそうだ。処女フェチじゃないが

少し救いだった。まあそんな事を気にする小さな男だ。

何か大きな事をやってみせる。男になったからには。

とは言うものの学校を卒業してボクはプラプラしていた。

高校で金は稼いだ。しかしこれだという仕事はなかった。

夢があれば人は強く生きられる。そんな言葉を頼りに日々暗中模索。

ボクはこの頃から一人でいる事が多くなった。友達が一人また一人いなくなっていくのは身を切られるような思いだったが、ボクには人と繋がれる手段がなかった。正確に言えばパチンコもサッカーも自我を守る為の鎧みたいな物である意味何もしてなかったようなものでもない。

タバコを覚え、たまに酒を飲み、今まで見えていた自分の鏡に映る姿が

曇りガラスに遮られているような、そんな気がして自分を見失いそう・・・。

それは目的を持ってない青年がみんな通る道だという事に気付く術はなかった。

そこでボクは母の病院に見舞いに行く事にした。正直彼女の病気については

なんの知識もなかった。精神分裂病という何か怖い名前の、得体の知れない

霊に取り付かれたあちらの世界に行ってしまった人の事を指すのだと思っていた。

母は元気そうだった。「文科、元気だったかい？ 大学は順調？」

「大学は行ってないんだ。会うのは3年ぶりかな。でも前来た時は母さん

寝てたから。」

「そうなの。頭が良い子だからね。浪人してもいいから大学行きなさい。」

何々しなさい、何々しなさい、何々しなさい。昔からちっとも変わってないように

思えた。

「母さんの期待に添えるように頑張るよ。じゃあね。」

同室の年齢不詳の女が鋭い視線でこちらを見ていた。

ボクは帰り精神病に関する書物を山ほど買った。書店の店員が奇異な目で見ると・・・・。

しばらくの間読みふけてノイローゼになりそうになったが大体の事はわかった。

父さんの入院している病院にも行く事にした。母さんのように閉鎖病棟ではなく

みな普通の人のような感じがした。ただ表情は生気がなくその点

健常者とは違う

所だった。

父さんは介護福祉士にパウチの交換をされている所だった。

「文科見ないでくれるか。俺の傷を。」

「うん、わかった。」

それはきつと心の傷の事も言っている。たぶん。

チラッと見た腹の十字の傷。自殺未遂を図ったのは本当に

母さんが発狂したからなのか？

それだけではないような気もする。それだけでやってしまった、

そんな気もする。

父さんはいつも笑顔を絶やさない明るい人だった。僕が中学を

卒業する時まで。母さんの事も受け入れていると思っていた。

それが何故？

「父さん何故自殺未遂なんてしたの？」と聞く勇氣はなかった。

「文科、退院するまでには少し時間がかかりそうだ。まだ死にたい

という気持ちがある。お金の事は姉貴に頼んである。浪人してでもいいから姉さんみたいに大学に行け。」

母さんと同じ事を言う。しかしボクは自分の脳に異変を感じ始めていた。

友達といっても会話が出来ない。忘れっぽい。人の話してる事の意味が理解

できない。

ただする事もないし、最大手の予備校には行く事にした。授業はさっぱり理解できず、

新しい友達もなかなか出来ない。それでも我慢して半年通った。

そして行くのを止めた。

一人暮らし。家に籠る様になった。不眠気味だった。

正直、オナニーばかりしてた。

女の事？それは考えてなかったか。どうだったか。

P Cのエロゲーがオカズだったから。

理子ちゃんとのSEXは3日で忘れたような気がする。

性癖異常者、いや世の中にはもっと多様な性の形がある。

そのなかで二次元に興味を持ってしまった。ありがち？

不潔だ。

犯罪者になるんじゃないか。そう思ったら女性の裸を

思い浮かべる。でも綺麗だったなとだけ回想してみても

性欲、そう正常な性欲のインポテンツなんだ、きっと。

そういう結論。オナニーも次第にしなくなった。

電器店で18禁のパソコンソフトを買う度に女性店員が

あら、この子みたいな笑みをいつも浮かべるから。18だから

恥ずかしくはない。そういう時には勇猛。何が悪い。

でも僕は考えた。女にナメられる、それは悔しい。

次第にボクは2人目の女性を獲得する為には、顔が大事。

なんといってもそうだろう。なんだかんだ言ってたってやっぱり

顔はカッコ良い方がモテるに決まってる。そう考え出した。

第三部（前書き）

うっそかなホントかな？ 若い頃から逝っちゃってるね。

第三部短くてゴメンナサイ。えゝ新章には突入せずお話追加しました。変な所で終わってるので。

第三部

ボクはあまり有名ではないK美容整形外科に相談に行った。

先生に顔を診てもらって、先生は笑った。

「福笑いみたいな顔だね。」

続けて「目が一重だし、鼻が低い、口が曲がってる。ちょっと

整形後シミュレートしてみるかい？」

パソコンの画面に映し出されたのはボクとは違う男の顔だった。

だがブサイクには変わらないように見えた。

「このくらいかな。直すとしたら。どうだい？」

「いい男ですね。」

「今よりはだいぶ良くなるよ。二重にして隆鼻術を行う程度で。」

「でも痛いんでしょう？」

「うーん、麻酔はかけるけどみなさん痛いとは仰るね。まあ一生の事になるかもしれないから少し考えてみた方が良くないかな。」

「わかりました。今日の所はそうします。」

帰り際看護婦が「先生あんなカワイイ顔の子整形するんですか？」と聞こえた。それがまた癪にさわる。先生は「福笑いみたいな顔」と仰ったのだ。

そして教えてあった電話番号に電話が来た。「ああ。佐藤君かい。言うの忘れてたけど蒙古ひだも切った方がいいかもしれないね。そうするとより目が大きく見えるよ。」そういう電話だった。

どうも悪徳な整形外科医なような気もする。しかし説明が丁寧だ。

「必ずカッコ良くなれるよ。」そんな事も言っていた。

ボクは新しい自分に生まれ変わるか大袈裟だが、逡巡していた。

そういう考え方向かったのには色々理由があるのだが、

まずは引きこもり状態から抜け出すのが先決だ。

パチンコは規制がかかり勝ちにくくなっていた。その大都市でさえも。

よって高校時代にアルバイトは経験しているし、姉に百万円約束通り送って手元には百万ちよつとしかないし、働く事にした。

しかしどういいう仕事が良いだろう。普通免許は持っていないのだ。
車で人を轢くのが怖いから。

求人雑誌を片っ端から漁る。コンビニの店員、営業、派遣、

取り立てて才能がなくても出来るような仕事はそれくらいしか

見つからない。

そんな中未経験OK。働きながら資格が取れます、という整体師
の業務委託の仕事を発見した。

資格を取れば月給40万円も可能らしい。パチンコでも一月にそんなに

稼いだ事はない。

そう元々ボクは専門性の高い仕事をしたかったのだ。中学生の時の
将来のビジョンとは使う所が、頭と体という点で違うが。

これに応募してみるか。写真付き履歴書じゃなくても良いようだし。

もうこの頃は醜形恐怖症というノイローゼに今思えば近かった頃で

顔写真付き履歴書ってだけで、顔を商売道具に使うんじゃないか等と

面接官と企業を人を顔で判断する風俗営業店のように被害妄想して

いたので、さっぱり経験もないのに自分にはこういう会話や感情の交流が必要ない実力第一主義の仕事があつてるのだと、もう、ありもしない

実力を試してやれと思い電話した。

そこは大型銭湯に付設されているちっちゃなちっちゃなお部屋と6台の

ベッドがあるだけの東洋医学丸出しの地味な仕事場だった。

ちっちゃなちっちゃなすり硝子の中の、ちっちゃなちっちゃな部屋にいるであろう面接官を呼ぶためドアをノックした。

誰も出てこない。「すいませーん。」誰も出てこない。

「なんですか？」

後ろから声をかけられた。

女性だった。中学生のようだ。ここでは中学生も働いていいのか。

「面接希望？」やけに生意気な大人びた口調の中学生だ。

落ち着き払っている。「そうです。」「そう、今鹿山先生呼んでくるわ。」

そう言って女性は整体室から出て行った。

少しして60歳くらいの男性が来た。パンチパーマだ。やっぱりこういう

職業はヤクザ稼業なのだろうか？

ん、歩き方がちょっと変だ。気に障るというほどでもないが。

その鹿山先生という方は三畳半もない部屋に僕を呼びつけ

座らせた。

「よっこいしょ。」そう言って座った鹿山先生の足を見て

ボクは驚愕した。白衣の上からでははっきりとはわからないが

両足とも義足のようなのだ。

視線に気付いたか鹿山先生は言った。

「ああ、これかい。交通事故だね。両方とも切っちゃったんだよ。

この仕事始めてからだから助かったね。はっはっは。」

義足それも両足が無くても出来る仕事？簡単なのだろうか？

「先生は車の免許持ってるんですか？」ボクは聞いた。

「ああ、持ってるよ。運転に支障はないからね。」

「ボク運転免許持ってないんです。その・・・事故起こすの怖くて。」

「それじゃあ仕事の幅も狭いだろう？家なら寮もあるし交通の便もいいから持って無くても構わないよ。はっはっは。いるんだよな。」

「そういう子がね。駆け込み寺さ。てんかん持ちの子も働いているよ。」

「てんかんですか・・・危なくないんでしょうか？」

「発作止めの薬飲んでるし、万が一の時は俺が助けるんだ。」

「そう言ってくすんだシルバーの結婚指輪についた歯型を見せた。」

「コンコン。」

ふいに休憩室のドアをノックした人がいた。

「副主任いる？」

「ああ、今面接中。」

「僕も加わります。副主任じゃ説明できないでしょ。」

「どうやらこの整体室で一番偉い人のようだ。主任だろう。」

メガネをかけた太鼓っ腹の34〜35歳だと思われる白衣の
人が入ってきた。

「はじめまして。北島です。窮屈だろう。」

そう言って沢山の書類をテーブルの上に載せた。

「早速なんだが今一人止める事になって人手不足なんだ。

我が社、身健は全国各地の大型銭湯に展開しているんだが

どこもかしこも人手が足りない。何故だかわかるかな？」

「いいえ。」

「とにかく技術が必要だし、体力もいるんだ。だいたい一年も

すると、初心を忘れて手拔きの施術を行う輩が現れる。そうすると

評判が落ちるからね。辞めてもらう事になっているんだ。」

なんだか難しい仕事のようだ。アルバイト感覚というわけには

いかなそうだ。

「ん、お客かな。じゃあ副主任後はよろしく。」

そう言って主任は休憩室を出て行った。

小さな声で「あいつは堅物なんだ。普段は全然喋らん。もう15年もやってるが施術の方はからっきしで、客からのクレームが絶えないんだ。」

社長の犬みたいなものだな。俺の事を頭が悪いからと馬鹿にしているが

なあに、この整体室は俺で持つてるようなもんさ。」

なるほどこんな狭い空間で顔を突き合わせていればみんな嫌になるだろう。

それが本当の原因だろう。人間関係からくるストレス。

鹿山先生はあんたが北島先生なんじゃないですかと言いたくもなる顔で

「まあ簡単に言うところでは給料を貰いながら経験を積んで3年経てば

整体師の認定資格が貰えるってだけの話なんだけどな。整体師と言っても

カイロプラスチックじゃないぞ。指圧のことだ。勘違いしている人間が

多いからな。はっはっは。」

ボクは若くして腰痛が酷くてカイロに通っていた事があるが、

カイロプラスチックと言った人は聞いた事がない。とりあえず

鹿山先生は強面なので愛想笑いをしておく。

さて問題はこの仕事をやるかどうかだ。その前に中々愛らしい顔をしていたと思われる中学生らしき人物の事について聞こうと思った。

「あの、この整体室では中学生を働かせているんですか。まさか違いますよね。高校でたてなのかな？」

「うん、誰の事だ？ うちには中学生も高校生もないぞ。男か女か？」

「女の子です。」

「あゝじゃあ桜田だ。あいつ凄い童顔だからな。でも魔性の女って陰で呼んでるぞ。気をつけろ。」

「歳は何歳なんですか？」

「こだわるな。惚れたか？」

「違います。」

「あっちのお客さんの休憩所でカップラーメン食ってたから聞いてみる。

それと仕事がなんの関係があるのかね。」

近頃の若いもんはわからん、という感じでアメリカ人みたいに手の平を上

向け、肩先くらいまで上げて見せた。

その女性は確かにイスに座ってカップラーメンを食べていた。カップが真っ赤だ。

カプサイシンがどうのこうのと書いてある。

「何、あなた面接終わった？」

春先の昼間の柔らかな太陽を浴びている彼女はどうみても中学生にしか見えない。

「話が長くなりそうなのでちょっと休憩です。」嘘を付いた。面接後はボクのやる気

の問題だけで決まりそうだ。

「あの見た目高校卒業したてとかですか？10代ですよね？」

「なに、私？26だよ。この仕事歳関係ないから。あなた面白い顔してるね。」

ぷっ、意外にこういう顔モテたりするのよね。私ちよつと時間無いから

鹿山先生の所に戻りなさい。」

ちよつと小太りの彼女は辛そうなラーメンを汁まで飲み干しながら
そう言った。

少し彼女に興味を持った。仕事をやってみようと思った。

「どうするんだい。後は君のやる気だけなんだけどな。」

「やってみます。」そう答えた。

「そうか。長い道のりだが頑張れ。」

「コンコン」さっきより少し荒々しい感じのノックの音だ。

たぶん20歳にもならない僕と同年齢くらいの男、ではないか？

「はいな。」

「面接に来ました坂下です。」

「ああ、今丁度終わった所だ。入って良いぞ。君には後からまた
後から連絡するから。」

入ってきた男は僕より少し大人びた悔しいがカッコ良い男だった。

少しライバル心を持ちつつ「失礼します。」一礼してボクはそのちっちな

ちっちな休憩室を出た。

電話によると試用期間3ヵ月その前に適正テストというのがあってそれに

合格しなければ契約して貰えないとの事だった。

毎日、練習して自転車で家に帰る生活が続いた。

坂下という男もテスト採用されていた。

後、丁度五十歳になる子供が十人もいるというおばさんがいた。

伊倉さんといった。「あんた、今の所一番下手糞ね。」

最初にかけてきた言葉がこれだ。小柄でどこから十人もポンポン

産んだんだという感じだが、旦那が元レンジャーという事で納得。

歯が欠けてヤニだらけ。顔は土気色。「この仕事水商売みたいな物

らしいですよ。」と皮肉をこめて言ったら、「あなたには女性の指名

つかないだろうね、ハハ。」とこちらも皮肉たっぷり。でもなんだか

気は合いそうな気はした。

実際の所は主任の評価としてはボクが一番上手で坂下という男が

ボーダーライン上らしかった。

三週間くらいして三人が呼ばれた。

「今の所の評価としては佐藤君が合格ラインですかね。伊倉さんはその少し下。坂下君は少し頑張らないと採用できないかもしれないかもしれません。」

今の所殆ど我流でやってるみたいだから。チャンスは後一週間です。

「

坂下が頑張らなきゃならないのはそりゃそうだろう。

ボクは主任に言われた事、施術のポイント、接客態度、

全てメモしてるのに、坂下という男は見本など何処吹く風、長い手足が邪魔

なのだろうか、ぎこちないのにボクがノートに必死に情報を書き込んでいると

「何やってるんすか？きつと厳しい事言うだけ言って全員採用する気なんですよ。」

等と言って来る。言われてその危機感のなさに驚くしかなかった。

社会経験の全くないボクからしてもおかしい男だった。

ふるい落としのテストの日が来た。

一番手はボクだった。

30分間の健康コースというのを40分以内で施術せよ、

というのが目標だった。ボクは自分で書いた絵付きの

解説書を思い起こしながら今までこんなに力を入れた

事はないのではないかというくらい力を入れ、重圧を

かけた。45分かかって施術が全て完了した。

「北島先生何点ですか？」

「佐藤君は本当にすぐ点数を気にするな。自分に自信を

もっと持ったほうがいいよ。採点らしきものはちゃんと

してあるから他の2人が終わるのを待っててくれるかな。」

2番手は伊倉さん、3番目は坂下。2人とも45分くらいかけて

施術を終了した。坂下は相変わらずマニュアル無視だ。

受かるのだろうか。

休憩室は4人が入るのがやっとなので、鹿山先生は整体室の

パイプイスに座っていた。桜田さんは受付をしている。

てんかん持ちだという中田君はお客さんについていた。

「結果を発表します。佐藤君75点。伊倉さん70点。坂下君65点

70点が合格ラインですが、坂下君に関しては光るところもあるので

長い目で見て採用する事とします。」

良かった。安心した。北島先生が陰でポンツと肩を叩いてくれた。

どうもこの人はボクをひいきにしているようだ。初めての仕事、

偉い人が味方というのは安心するものだと思った。

伊倉さんは「おかしいわね。あなた1番下手糞だと思ってたんだけど。」

まあこれからよろしくね。」と声をかけてきた。

坂下の野郎はお情け合格だというのにはしゃいで「ね、だから言っただでしょ。」

とさも当然のような面をして、受付している桜田さんと親しげに談笑し始めた。

ノリの軽い奴だ。馴染めそうもない。

その時、整体室から「きゃー！大丈夫ですか。大丈夫ですか。」という声が聞こえた。

ビックリして休憩室から出てみるとお客さんの施術をしていた中田君が痙攣している。

鹿山先生が「中田大丈夫か！」と声をかけながら口の中に手を突っ込んでいる。

一分ほどで痙攣は治まった。「ふー小さな発作だったみたいだな。少し暗いところで

休め。」

エネルギーを全て使い果たしたような憔悴しきった顔で中田君は休憩室に

入って行った。鹿山先生によると近頃発作の頻度が頻繁になってきている

が、
脳腫瘍（その時初めて中田君のてんかん発作の原因を聞いたのだが）

もしかしたら大きくなっているかもしれない。今度発作を起こしたら実家に

帰らせた方が良くかもしれないという事だった。中田君は北海道の片田舎から

出てきていて今は北島先生と寮で同居しているらしい。歳は18。手術では

取れない場所に腫瘍があるので対処療法しか手立てがないのだそうだ。

どうしても同情を禁じえなかった。まだ若いのに可哀相と。

しかしそんな状態で働いている中田君を偉いなと思うと同時に、実の弟の

ようなそんな気持ちにさせる、愚痴も言わず一所懸命な所のある子だった。

いよいよボクが初めてお客さんに付く機会が与えられた。

「健康コースでお願いします。先生。」

男のお客様にそう言われてボクの心臓は結婚式の教会の鐘の音のよう

高鳴った。というか不安だった。

ベッドの上に乗り片膝を立てて首から指圧していく。「お客さん凝ってますね。

痛いでしょう」等と言いながら。初めてのお客様は「そうですね。パソコンの

使い過ぎでね。痛いっていうことは凝っているって事ですよね。」

「まあそうですね。」あえて無駄な事は喋らない。痛いのは当たり前なのだ。

鹿山先生からとりあえず慣れるまでは力一杯押して痛みを与えるんだ。多少

ツボをはずしても痛ければお客さんが効いてると勘違いしてくれるからな。

とアドバイスされていたからだ。

30分の所、40分かった。首、背中、臀部、太腿の裏、ふくらはぎ

上を向いてもらって同じ様な部位を2回づつ押すのが健康コースだ。最後顔

のツボ押しをして終了した時には安堵と疲れが波の様に押し寄せた。

「いやー楽になった。どうもありがとうございます。」そう言って40代位の男性

は帰って行った。北島先生が寄ってきて「初めてにしては上出来だよ。

大抵の人は怒って帰ってってしまうんだけどね。佐藤君はあまてだから

気持ち良いのかもね。」

「あまて・・・ってなんですか。」ボクは北島先生に聞いた。

「ああ、あまてっていうのは親指が大きく反り返る人の事さ。逆に反らず

棒状の親指がにがて。にがては痛いんだ。お客さんが。」

「そうなんですか。」

「治療コースはまだ時間通りにするのは難しいだろうからしばらく健康コース

を施術して腕を磨くといい。」

「わかりました。そうします。」

何だかわからない事が多いがとりあえず1人目は上手くいって良かった。

お客さんがこない間は練習する。何故かボクの練習台は伊倉さん。

桜田さんは坂下と組む。坂下が下手くそだから先輩の桜田さんがつくの

だろうが、ちょっとした嫉妬心を隠す事は出来なかった。

「佐藤君何処見てるの？ 圧全然入ってないよ。私に集中してよね。」

「すみません。」

伊倉さんは腰が痛くてこういう会社に入ればタダで治療して貰えると思っ
て入ったらしい。困った事にこの人はボクの考えと相似している
事が多すぎて、「なんで？」と入って2週間くらいで早速、疑問と
嫉妬

に取り付かれる。

1ヵ月経って、練習台は相変わらず伊倉さん。時々北島先生と鹿
山先生

が見てくれる。

鹿山先生が聞いてくる。「佐藤君指は痛いかな？」

痛くなかった。「痛くないか。まあしょうがないな。指押しだって
事だな。」

指押しって指で押すんじゃないの？とキョトンとしてみると、鹿山
先生は

「指圧はな腰で押すんだよ。腰で。指が痛くないのは指押しになっ
てる証拠だ。」

実際佐藤君の施術は痛いんだよ。今はいいけど後々常連のお客には
バレる。

本当は押すと痛気持ち良いものなんだ。」

「へーそうなんですか。」

おもむろに鹿山先生は今で言うエド・はるみの「グー」みたいなポーズを

とり親指をボクに見せた。太くて親指の表面がまるでシリコンでも入って

いるかのように隆起している。触らせてもらうと柔らかくてふわふわしている。

こういう指になるまでに10年はかかるだろうとの事だった。

かの浪越徳次郎の指はまるでマシユマロのように柔らかく、押されると絶大

な気持ち良さが味わえるんだぞ、とも教えてくれた。社長の父が浪越徳次郎

と親交が深いらしい。1度押してもらいたいものだが、社長の施術もそれに

勝るとも劣らないらしい。

「それに比べたら北島は酷いな。マッサージ師と整体師両方の資格を持っているんだが

あいつ独自の流派を作り上げちゃってるんだな。マッサージ指圧と

いうのを。こねくり回す物

だから、揉み返しが酷くて・・・」

「揉み返しって何ですか？」

「揉み返しってというのは指圧した後、少しだるくなったり押された部分が痛くなったり

する事さ。1週間様子みてまだおかしかったら施術者の腕が悪いって事。とにかく庄は

垂直に入れるんだ。これが基本だ。じゃないとツボにヒビカナイ。」

「響き・・・」

「そう響きな。覚えとけ。忘れる前に音を上げるかもしれないがな。はっはっは。」

第四部（前書き）

少し短いですが急いで追加しますんで。
この2ヶ月サボってばかりいました。（笑）

第四部

三ヵ月後、ボクの立場は微妙な位置だった。

坂下がメキメキ力をつけ指名を取るようになっていたからだ。

桜田さんの特訓のせいだろう。ボクには指名が付かない。

悔しい。

そんな時一人のお客さんとの出会いがボクを変えた。

中年の男性のお客様。ボクは治療コースも担当するようになっていた。

本来五十分なのだが、一時間かかる。仕事が遅いのだ。

相変わらずの指押しでそれまで褒められた事がなかった。

そのお客様は施術後こう仰られた。

「君の手温かくて気持ちが良いね。まるでサウナみたいだ。」

ボクは生まれつき手汗を良くかく。それが気持ち悪がられて

いるのではないか？

と思っていたのだが、その言葉で一つの武器を見つけたような気がした。

ボクはそれは手汗のみの効果ではなく、手当で、

つまり一種の気功に近いものだと解釈した。

それから初心を思い出しとにかく一生懸命施術して手に汗をかき

温度を上げるように工夫するようになった。

そのお客様はボクを指名するようになった。

「良かったね。文科君。坂下君大分上達したから今度私練習台になってあげるわ。」

桜田さんがそう言った。彼女はボクが入る二ヶ月前に入ったのだが、

凄まじい練習量で指名もたくさん取っていた。

それには秘密があって、彼女は北島先生に上手い事取り入って

夜中の三時まで練習していたのだ。それはちょっとした

噂になっていて「随分仲がよろしいんですね。」

と鹿山先生にその大型銭湯の社長が皮肉を込めて言ったらしい。

今では二人は付き合っているのではないかという鹿山先生の勘繰りもあるほど。

特に気にしてはいなかったのだが。

全くある日突然の事だった。ボクが桜田さんに初めて練習台になってもらった時。

彼女の体に触れた瞬間、ボクは顔が真っ赤になっていた。桜田さんにも「顔赤いよ？」

と笑いながら指摘され、しどろもどろ。心臓がドキドキする。

それは今まで体験した事の無い感覚だった。

ボクは桜田さんの顔をじっと見つめていた。

「ちゃんとお尻も押してよね。Hな事考えないでよ。」

「はい。」

その日、家に帰って七色美人という詩を書いた。

つかめそうで

つかめない

雲のような君は

七色美人

届きそうで

届かない

空のような君は

七色美人

横なぐりに吹きつける

雪のように 時に冷たく

ベランダの窓から差し込む

太陽光線のように 時に温かく

川があるから 橋が必要なように

橋があるから 人が行き来するように

花粉を求めるだけで 君は

自然と花を咲かせる手伝いをしている

「理屈じゃない」なんて

今でもこれっぽっちも信じちゃいないけど

メロディーなんていらぬ

ビジョンなんていらぬ 今は

雨上がりの丘の上に

虹の橋がかかって

遠くを見つめる君は

七色美人

休みの日、実家に一度帰り家中の掃除をした。一年半誰も住んでない家。

子供の頃を思い出す。幸せな普通の家庭を。母が統合失調症になる前。

父が自殺未遂をする前。嫌でも涙が溢れてきた。残念な気持ちだった。

病院に行く事にした。まずは母の病院。母は寝ていた。看護師さ

んに

よると、「最近寝たきりなんですよ。お薬の副作用かしら。それにしても

記憶力の良い方ですね。あなたの子供時代の事をまるで今起こっている

かのように話すんですよ。それは認知症の前駆症状でもあるんだけど、

まだ若いからその心配はないんですけどね。ただ起きてる時間が極端に

短くてレクリエーション等にも殆ど参加されないんですよ。

食事を摂る時もゴホンゴホンむせて、少し痩せたかも知れません。この

一年で。まるでもうすぐ死ぬお婆ちゃんみたい。あ、ゴメンナサイ。

こんな事いったら悪いわね。でもまだしばらく退院は無理そうなんです。

大変ですね。息子さん。そういえばお姉さん東大なんですってね。凄い！

でもその事にはちっとも関心がないみたいなんですよ。息子が救ってくれる。

私がお腹を痛めて生んだ子だものと言って、まるでお姉さんは自分の子供じゃ

ないみたい。恋愛妄想というのが時折見られて、あの人私の事好きなんだわ。

毎日ラブレターがたくさん来てるもの、なんて言って、でも勿論来る筈ないでしょう？

そして最後にこういうの。私の恋人は文科だけだって・・・。」

父さんの事はどう思ってるんだろう。話にも出てこない。

「そうなんですか。先生が退院出来ると言ったら教えて下さい。姉さんと父と

相談しますから。」

「ええ、わかりましたよ。」

父の病院に行った。

「父さん。ボク今働いているんだ。整体師の仕事。あまり順調とは言えないけど

頑張っているから。」

「そうか、大学は行かないのか。将来の為に大学くらい出させてやりたかったんだが、予備校は合わなかったか。

父さんも母さんも入院しているものな。お前が勉強に関してあまり興味がないのは昔からわかっていた。中学の時は弟にみっちり詰め込み教育

させたから出来たかもしれないけど、高校ではさっぱりだったんだろ？」

「数学が全然わからないんだよ。留年しそうだったんだ。」

「まあしょうがないな。佐藤家の家系はみんな頭が良くて全員国立大卒なんだが文科

には期待して無かったよ。天然ボケだからな。ハハハ。」

父さんが笑った……。鬱から回復傾向にあるのだろうか。主治医の先生とお話した。

「だいぶ良くなってますよ。退院出来る日も近いかもしれませんね。

仕事は当分止めた方が良いとは思いますが。

息子さんは今どちらに住まわれているのですか？」

「A市です。」

「とりあえずお父様と同居なされた方が良いでしょう。パウチを付けたまま働くのは

嫌だと仰られているので、腸内洗浄を毎日行う事になりますが。

やり方はもう慣れたもので息子さんが心配するには及びません。」

「そうですか。退院できそうになったら連絡を下さい。今A市で働いておりますので

そちらでボクのアパートに同居するという形にしますから。

父の仕事探しは難しいでしょうが、一応商大卒なので働き口は探せばあると

思いますから。」

「大変だね。お母さん精神分裂病なんだよね。でもあれは天才病の一面もあるから。

だから淘汰されていけないでしょ。鬱も真面目な頑張り屋さんが罹る病気なんだ。

君のお父さんの場合がそうだよ。思い詰めて思い詰めて、最初の頃は今度は

首でも吊らんばかりの勢いだった。腹を切るくらいだからとにかく

自殺願望がよっぽど強かったんだね。

紐だの刃物だのは完全に隔離して、少し暴れる事もあったから身体拘束も

せざるを得なかったんだけど。でも今は治癒に向かっているから自分の仕事を

頑張ってください。」

「はい、わかりました。ありがとうございます。父の事よろしくお願いします。」

ふゝ疲れる。大人とは死に向かっていく。沈む消える月の様に。子供とは死について

何も知らない。ただ太陽の様に昇っていくだけ。人それぞれ時期は違うが転換期と

いうのがあるだろう。子供の頃から大病を患っている人なんかは死について少し

早めに考えなくてはならないわけだ。それを大人と子供の境界線とするにはあまりに

ニヒリズムかもしれないが、実際死という物を子供は怖がらないだろう。大人は怖がる

かもしれない。お年寄りが「早く迎えが来ないだろうか」なんて言うのは嘘でもっと

長く生きたいはずである。と、この頃は若いからそういう風に考えていた。

40、50になったら誰でもいずれは死が訪れるという事を受容し

ているだろうし、

しかしそれは日常生活ではジョークみたいな物でいつかはそうなるだろうという

程度の認識でしかないはずである。じゃないといつも死の呪縛に囚われて

生活する。それではあまりに苦しいだろう。誰にでも死に欲というのはあるらしいが。

結局母はもう「世間」というものから隔絶されて生きるしかないのだろう。

父はもしかしたら勇敢な戦士として迎えられてもよい存在かもしれない。

わざわざ自ら命を絶とうというのだから。ボクは死について

正確な知識など持ち合わせていないし、持ち合わせたくも無い。

ただ時間は過ぎ去っていく、親が歳を取りいずれ死ぬ。それは認識外ではあるが

事実として突き付けられているのだ。病院それも精神科、少し心に腐食した

毒物を注入されたような気持ちになるのも無理はなかった。

第五部

六ヶ月が経った。指名が二、三人付くようになった。わざわざ地元から来ている

市長さん。この人が筋金入りのカチコチで指が痛い。最初鹿山先生を指名していたの

だが、先生は忙しく僕でも良いという事になった。もう一人も中々の物で色々な整体

室を物色しているようだがここがお気に入りようだ。僕だけが未だに治療コース一時間、

もしくはそれ以上取るので僕を指名するようだ。これはルール違反というか忙しい時は受付

係を担当する人間が五十分プラス休憩十分でお客を取るものでちょっとしたトラブルになって

いる。矯正してくださいとは北島先生からは何度も言われてるのだが、お客様が満足してく

れる為には少しサービスしなきゃとおっかなびっくりの所もまだある。

その市長さんの場合、治療コースを終えると汗だくだ。

治療コースはベッドの上に乗って膝を立てて押さなければならな

いツボがある。バランス

感覚が必要だ。幸い僕はサッカーをやっていたせいでバランス感覚が良い。だから滑った

り、ベッドから落ちそうになる事はない。坂下は背が高すぎるのか足が長いのか、腰の位置

が高く滑ったり、ベッドから落ちそうになる事がある。僕は施術中そういう場面を見てほく

そえんでいる。しかしマイペース施術を桜田さんに改良された為か姿勢はきちんとしてる

し、圧も強い。押しもらった事があるが、桜田さんには劣る物の、なかなか気持ちが良い

い。坂下も指名は二、三人といった所か。最近桜田さんは坂下の施術は指導してないから頭

打ちのようだ。

そんなある日、中田君が大好きな唐揚げを昼ご飯に食べている時に発作を起こした。

大発作だった。「中田、大丈夫か！」鹿山先生がすぐに舌を噛まなように例の指輪を口に

挟もうとするが痙攣が酷い。指を突っ込んだ。下手をしたら指が噛み切られてしまう。先生

の指は血まみれだ。

「おい、誰かスプーンとガーゼ！」鹿山先生が叫んだ。ビクビクと痙攣が数分続く。失禁を

して発作は収まった。フラフラとトイレに行く中田君。鹿山先生が佐藤、坂下危ないからつ

いて行ってやれと言う。まだおしっこがしたいのだろうか。坂下が心配そうについていく。

「ついて、こないで、ください。」発作を起こした後は眠くなる事が多い。しどろもどろの

口調でそう言ったのが後からついていった僕に聞こえた。「中田君、僕はいいかい？」

「佐藤さんならいいです。ちょっとおしっこして寝ますから。」僕は坂下より

中田君に信頼されている。日頃の行い、言動そういう物からだろうが。

失禁した後だというのにジャーっとおしっこをした。

パンツを取り替え白衣も着替え休憩室を暗くしてすぐに中田君は眠った。

「もう限界だな。」鹿山先生が言った。このままじゃ俺がない時

発作を起こしたら死んじ

まう。親元に帰らせないと。坂下は拒絶されたのがショックだったのか元気がない。僕は中

田君を非常に可哀相に思った。

その夜中田君に近くのラーメン屋に一緒に行きませんか？と誘われた。

相談したい事があるからと。「僕辞めさせられるんでしょうか？」
「・・・」

仕事を続けたいのに脳腫瘍のために続けられない悔しさは伝わってくる。

「僕童貞なんですよ。死ぬ前に彼女欲しかったな。」「なんとかするよ・・・」

そんな言葉しかかけられなかった。哀れみって感情は愛じゃない。いつ死んでしまうかわか

らない人間にかける言葉が見つからない、それは当然かもしれないが、つまらない慰めの言

葉しかかけられないほどただ哀れみの気持ちしか湧いてこない。

僕がもし今まで元気良く生きてきたなら、いや人並みには元気だったかもしれないが

「なんとかなるって！ 頑張りなよ！」と語尾を上げて話したのか
もしれないが、

色々な事がありすぎる家庭だったから、姉さん頼みのところもあったから、童貞ではないか

ら、一人っ子の中田君の辛すぎる現実の前に同情する事しか出来なかったのだ。

中田君はしばらくして整体室を辞めた。

鹿山先生が実家に中田君を送り届けた時母親にこう言われたそうだ。

「この子は働けるような体じゃないんです。どうしても働きたいと言うから預けましたけ

ど、結局守ってくれないんですね！送り届けて満足ですか？もう話すことなんてありません

ん。帰ってください。この子の寿命が縮みました。」と。

「俺は間違っていたのかな。中田を立派な整体師にして一人立ちさせてやりたい。

俺みたいに障害があっても出来る仕事だからと親御さんには言っていたんだが。

結局無理だったのだろうか。中田は家で死の恐怖と闘いながら短い人生を何もせず

天職なんて与えられる事無く死んでいくのかな。寂しいもんだな。」
鹿山先生はそう独り言

の様に言った。

第六部

九ヶ月が経った。ある日桜田さんが車の故障で徒歩通勤してきた。丁度その日僕も実家に帰

りたくて桜田さんがタクシーで帰るというのを聞いて方向が同じなので一緒に帰りたいと

思った。

坂下は残念ながら逆方向だったので助かった。その日はとても忙しく桜田さんも僕もくたく

ただった。

桜田さん同じ方向なので一緒にタクシーで帰りませんか？と言った。

文科君曰な事考えてなければいいよという答えだった。整体室は騒々しい街中にあるが、二人

の帰る方向は人通りが夜になれば殆どないような郊外だった。

一緒に同じタクシーに乗り込む。桜田さん良い匂いがする。汗はかいているはずなのに何

か僕は少しもやもやした気持ちになった。

そして道がら半分くらい過ぎた頃、桜田さんがタクシーの運転手にあっち行って

こっち行つてと家のある方向とは違う方向に向かい始めた。最初何かわからなかった。

しかし何度も何度も道を変える。しばらくするとラブホテルの集まる台場の方に入る

り込んできた。

「降りよ。」

そう言われた。道すがら僕は困惑していた。何故急に？　しかし僕は桜田さんにア

プローチするチャンスだと思った。二人とも無言だった。大人の女性の香りは冬が

連れてきた贈り物のような気がして、手つないでいいですか？　と自然に切り出せた

「いいよ。」手を繋いだ。それで僕は満足していた。「キスも良いよ。」そう言われて

僕はふと北島先生の顔が浮かんだ。ある日、整体室近くのコンビニで手を繋いでいる

北島先生と桜田さんを見かけた事があるのだ。数回……。

それが気になって思わず口走った。「北島先生と付き合ってるんですか？」

桜田さんはしばらく口を閉ざした後「やーめた。やっぱり帰ろ。」
あ、桜田さんが帰

っちゃうと思ったが何も声を掛けられなかった。

その時僕は桜田さんに恋しているのに気付いた。

しかしその次の日から僕のPHSの番号が着信拒否にされていた。
坂下と北島先生とばかり

話す様になった事、僕を避けている事は明白だった。

僕には理由がわからなかった。始まった恋は一日で座礁した船の様に緊迫した雰囲気のもの

重い錨となっていた。

またなんで？ が始まる。昨日北島先生の事に空気も読まず触れたからだろうか？

あのまま桜田さんと寝ていれば恋人同士になれたのだろうか？
いや違う。彼女は

ただ僕で遊ぼうとしているだけだ。そうに違いない。そう思い込んだ。ひがみ根性に

取り付かれた僕は死にたい気持ちだった。理子ちゃんとの思い出が蘇ってきた。愛は

なかった。あのHには。桜田さんと寝たとしても僕の男の自信がメラメラ湧き出すとは

考えにくかった。もっと彼女を知ってから、完全に僕の物にしてからそういう関係に

なりたい、そういう思い上がった女性に対する扱い、そういうのも僕の性癖といつの間にか

なっていたようだ。

カッコ良くなりたい。女に惚れられたい。深層心理の中にあるこの思い上がりは全て顔のせ

い、とは言わないが、今一つ女性に積極的になれない理由の一つでもある。フォアダイスも

そうだ。

性的な器官（顔もその一つと言って良いだろう）が未発達なのだ。全て治さなければならな

い。全て・・・。

突然の事だった。年末突然北島先生の異動が決まった。北島先生には悪いがこれでチャン

スが巡ってきたと思った。坂下は突然辞めて既にいない。気まぐれな奴だ。桜田さんとまだ

電話で連絡を取っているようだ。親に金を半分出して貰って貯めてあった給料で新車のシル

ビアを買ったがすぐに事故を起こして廃車になったらしい。相変わらず馬鹿な奴だと思っ

た。桜田さんはとても心配しながらも時々笑いながら坂下の話を聞いていた。この二人は何

か運命を感じさせると言うか、仲が良かったので辞めてくれて助かったと思うとともに、こ

れからも連絡を取り合うと思うと嫉妬心を抑え切れなかった。この頃僕は彼女の体には興味

があまりなくせに心を奪う事に執心していた。

拒絶されるようになってから尚更。鹿山先生という既婚、六十一歳の男としては終わりがけ

の人であっても桜田さんが腰が痛いと言って鹿山先生が彼女の施術を義理で行う時でさえ狂

いような程の嫉妬心を感じた物だ。

そして北島先生のお別れパーティが開かれる事になった。彼女、桜田さんは何故か僕の隣

りに座った。付き合っていると思われる彼とお別れすることになつて寂しくて煮え切らない

僕に同情し始めたのだろうかなどと期待を持ったが、ただ先生の正面に座りたかっただけか

もしれない。

パーティの途中でお酒が入って、顔を見て涙を流していたから。

最後、北島先生、鹿山先生、伊倉さん、桜田さん、僕で写真を撮った。

北島先生が居なくなるのは僕にとっても痛い。上司に恵まれていたから今まで働けていたよ

うな物だ。

その点感謝しなくてはいけないと思った。「今までありがとうございました。」僕は言っ

た。佐藤君頑張っってね、と返された。「先生もお元気で」

その後桜田さんが北島先生の荷物を預かっているという事実を聞いた。

年末、整体室は一番忙しい時期だ。北島先生がいなくなって鹿山先生が主任に、桜田さん

が副主任となった。責任ある立場に立った訳で年末はフル稼働してもらわなければならない

存在だったはずだが鹿山先生と桜田さんは十二月二十九日から一月十四日まで一度も出勤し

なかった。本部には秘密で。

鹿山先生は無責任にも年末年始は休む時期だ。俺には家族がいるからな。桜田？ 知らない

ぞ。伊倉さんと桜田とお前がいれば何とかなるだろう？ 頑張れよ。

桜田さんの言い分はこうだ。主任が休むなら私も休んでもいいわね。佐藤君本部にチクった

らただじゃおかないわよ。

ただでさえ稼ぎ悪いんだからね。普段活躍していない僕と伊倉さんに普段の分を取り戻せと

言わんばかりだ。

B型の二人が残された。伊倉さんも不満たらたらだ。私にだって家族いるのに。O型とA B

型って自分勝手ね・・・。

こういう時いつもB型が苛められるんだわ。他の職場でもあったもの。B型はいつもキツイ仕

事を押し付けられて、頑張っても認めてもらえないのよね。

子供十人B型の伊倉さんの言葉には説得力があった。

第七部（前書き）

いや／＼全く手をつけてなかった・・・この半年。一応更新だけしますけど、600字しか書いてないんで・・・でも第七部は付け加えて行きますし

ちょっと僕の人生の転換期みたいな感じになると思うので、ご容赦下さい。

第七部

整体室の忙しい時期は去った。伊倉さんと僕の獅子奮迅の働きによつて。お客は少々は逃

がしたが二人では仕方のない事だった。何しろ2週間以上12時間休む間も無くお客に付い

ていたのだから。

そして繁忙期を過ぎて、しれっとした顔で主任と副主任が戻ってきた。僕は非常に腹立た

しい気持ちだった。それは伊倉さんも同じ様だった。本当に謝罪の言葉も無く、僕らが労力

を費やしたのは当然という様な顔をしているのだ。

疲れた……。伊倉さんはこう言う。「辞める時教えてね。」と。

僕は憤っていた。桜田さんが太ってきて、目の下に隈等を作りながら、「私、自律神経失調

症なの。」なんて、なんで急に腹が立ったのか良く分からないけど、嫉妬の変形の心理なの

だろうかね。

四月になって鹿山先生が新人の募集を始めた。三人入ってきた。一

人はピタゴラスの定理が

なんちゃらかんちゃら言ってる精神病っぽい人、後背の高い男の子と可愛い女の子。

その可愛い女の子は僕が高校生の時同級生だった立川君と同じ中学だそうで少し話が盛り上

がった。電波君はすぐ辞めたので桜田さんがその川島という男の子の指導、僕が鈴木という

可愛い女の子の指導をするように鹿山先生に言われた。

桜田さんは「君、川島君っていうんだ。カッコ良いね。」等と早速色香を振りまいている。

その手の早さに呆れて物も言えない。この色魔！等と思ってもやっぱりそれは嫉妬なんだ。

僕は鈴木さんに健康コースを一通り教えたが飲み込みが早く「じゃあ僕にやってみて。」

と言うとそこそこ庄も入ってるし時間通りに終えるからこの娘は使い物になるなと思った

が、桜田さん以外の女性の体に触るのはちょっと嫌だった。

ある日僕は鈴木さんから告白された。「好きです。佐藤さんとても仕事が出来るし優しい顔

立ちしてるから。」僕は少し考えさせてくれないかと答えた。

次の日シフトは僕と桜田さんだけだった。桜田さんはだるそうに狭い休憩室に寝転がって

て客が来ても「文科君代わりにやっというて」と言うだけだった。

少し時間が空いたので僕は休憩室でタバコを吸っていた。桜田さんはお尻をこちらに向けて

壁にべったりくっ付けて眠っているようだった。

僕は試したくなった。本当はこの人愛情を受けた体験がないんじゃないか。どこか寂しそう

なんだ。いつも。僕は衝動を抑えきれなかった。手を伸ばし……。彼女の髪をそっと撫で

た。

その瞬間彼女はパッと飛び起き「え、何？何？」そう言ってしばらく後に泣き出してしまっ

た。彼女はロッカーの荷物を急いで取り出して逃げるように帰っていった。

それからしばらく彼女は出社しなかった。聞いた所によると軽いノイローゼでメンタルクリ

ニックに通っていると言う。正直ざまあみろと思った。

鹿山先生がお前何か桜田にしたのか？と聞いてきたので復讐ですよと答える僕。

貴方にもね。流し台にぺっとツバを吐いて、鹿山先生と全く目を合わせず、ロッカーに入れ

ておいたお気に入りの小説などを全部急いでバックに詰め込み、「もう用はありません。さ

ようなら」そう言った。後日鹿山先生が桜田さんを連れて家に来て「佐藤辞めるの少し待っ

てくれないか？」と引きとめようとしたが僕の気持ちはそれでも変わる事はなかった。

そして次の仕事を探す前にやりたい事があった。

それは顔の整形手術だった。車の免許を取得する前にやっておかないとおかしな事になる。

僕は小規模なクリニックよりも大手の方が頼もしいと思った。美容整形外科がいい。一番

有名だろう。

北海道の中でも比較的都会なS市にあるので、スーパーホワイトアローに乗ってA市から移

動し、手術をすれば恐らく傷跡が多少残るだろうからウィークリー

マンションを二週間ほど

前もって隠れ家として借りておく事にした。

病院に行った所予約制だったので誓約書みたいな物と承諾書みたいな物を書かされ、一週間

後の手術となった。何しろ初めてなので少し予定が狂ったが、別に決意が揺らぐ事も無く一

週間後にはこの顔とおさらば出来るのかと思うとますます変身願望が高まってTVが面白くて

しょうがなかった。

手術当日 僕はベッドに寝かされて先生が「始めます。」と言った。看護婦が3人くらいつ

いていた。まず目かららしい。

点眼の麻酔の後下瞼の裏の朱色の部分に注射で麻酔をした。

瞼が裏返されてるような感覚があったが、視界が極端に狭い。出血はあまりしないようだ。

眼球は自由には動かせないようだが、光は見える。十分くらいで終わった。

あっという間だ。

しかし鼻の手術は面倒だった。まず麻酔の注射を上唇の裏、歯茎に刺さるかどうかという所

にするのだがこれが激痛なんてもんじゃない。途中で止めてもらおうかと思っただくらいだ。

で鼻、左側の穴のちょっと横を切開するのだが出血量が半端じゃない。だらだら流れるし、

口の中にも入ってくる。それで殆ど無理矢理プロテーゼを挿入するので骨と擦り合わさって

「ごりごり、ごりごり」と音が凄い。鼻の高さを鏡で確認させられた。あまり変わり映えし

ない。「もう少し高く出来ますか。」そう言うのと違うプロテーゼを看護婦が持ってきて、前

のを「ごりごり、ごりごり」と切開した所から抜き取り、先生が「ごりごり、ごりごり」と

挿入した。麻酔がかかっているのだが不思議な感覚だ。これだけやられても痛くないという

のは素晴らしい事だが、ごりごり感が気持ち悪かった……。

鏡を見て先生がこれ以上は高く出来ないよと言うのでじゃあこれをお願いしますと僕は決心

した。縫合が終わった後もう一度鏡を見せられて……全くの別人

というほどではないが

まあまあかなと自分では思ったのだが、看護婦さんが半泣きで「別人みたいですよ」と

言ったのが少し変な感じがした。顔中包帯だらけにされたのでタクシーを呼んでもらった。

エレベーターを降りる時男女混交の4人組に出会ったが、ビックリしている者もいたし、別

にどうとも思っていないような者もいた。タクシーの運転手も特に話し掛けてくることも無く

無事ウィークリーマンションに着いた。とりあえず傷口が塞がってからだな。もう後戻りは

出来ないけど。

第八部（前書き）

これも少しづつ付け足していきますんで。記憶を辿るのも案外しんどい物だから。

第八部

僕は世界一不幸な男だ。整形は失敗した。瞼は常に痙攣し、鼻に入れたプロテーゼは飛び出

し、鼻が無くなった。人からは奇異な目で見られ、親に整形した事がバレ、母親と同じく精神

科に入れられる……。そんな夢を整形してから5日後に見た。

明日が抜糸の日だな。包帯は既に取れているが、ガーゼはまだあてがっているので、まだはっ

きりどのような顔になったか分からない。

次の日〇美容整形外科に抜糸してもらいに自転車で行った。

「どうだい？」

うーん……。パッチリ二重だし、鼻も高くなったおかげで目と目が離れているのも気にな

らなくなっている。元々奥二重だったので時々まばたきし辛いがまあ許容範囲だ。先生によ

ればしばらくすれば気にならなくなるらしい。たぶん、たぶんだが前の顔よりカッコ良い。

「ありがとうございます。」

「何かあったらまた来て下さい。」

僕は1日早いがウィークリーマンションの契約を解除し、地元に戻る事にした。車の運転を

するのも仕事を探すのもその方が楽だろう。まず免許取得だな。まだまだ貯金があるので、

誰もいない実家に帰り、近くの自動車教習所に電話した。

免許を取得するのに親から恥ずかしながら少し金を借りた。実はこの頃パチンコはCR機が

台頭しだしスペックが不安定で中々勝てなくなっていたのだ。パチスロは四号機の末期でA

市では等価交換の店が多く設定には期待出来なかった。設定1でも勝てるとうたわれていた

克蘭キーコンドル、タコスロ、ワニ丸等は撤去され始め、CT搭載チャレンジタイム

機は規制されノーマルタイプが主流となった。

免許は実技で一度落ちたが無事取得できた。

第九部（前書き）

ここら辺からかな。歯車が狂いだしたのは。私の脳が既におかしかったのですが病識は無かったのです。

第九部

父が遂に仕事を始めると言い出した。基本一人で出来る警備員がやりたいようだ。

「まだ俺にも蓄えはあるよ。」とは言ったのだが、「父親らしい事がやりたい。もう死のうなんて甘えた考えは捨てて生まれ変わる」そう言った。

とりあえず実家で父と同居する事に決めた。

姉さんは大学院に進みたいようだ。

僕は株取引を勉強したいと思い出した。大学には行けなかったが決して馬鹿ではない。元手がある内にかつてのパチンコの様に必勝法を見つけられると思っていた。

仕事は女性トラブルが嫌だったのでアダルトビデオショップに勤める事にした。今までそんな物見た事が無かったし理子ちゃんとも一度きり……。最初はデモ映像を見てずっと勃起していた。

出会い系という言葉はまだ聞いた事が無かった。テレクラのカードが案外売れた。同僚の先輩の友達がセーラー服7万円もする物を買っていったりして、「あいつエロいな」と言っていた。最初社長に目をかけられていた。僕が無垢に見えたのか「昔は雑貨屋をやっていたんだ。倒産したけどな。」と倉庫を見せてもらった。息子さんのシーマを貸してやると言われ

「まだ初心者マークです。」と言うと「ぶっ壊しても良い。1度くらい事故を起こしておいた方が重大事故防げるし、壊れたらまた買

うから。」そんな感じだった。その時は社長が好きだった。奥さんがとても美人だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1034j/>

負け組みの視点

2011年11月14日05時43分発行